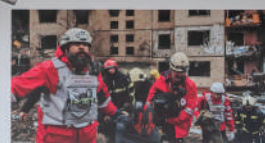


人間を救うのは、人間だ。

大阪・関西万博184日の記録



P31
国際赤十字・赤新月運動館
International Red Cross and Red Crescent
Movement Pavilion



人間を救うのは、人間だ。
The Power of Humanity



国際赤十字・赤新月運動館に寄せられた思いを
赤十字の未来につなぐ

日本赤十字社

目次

はじめに 日本赤十字社社長 清家篤 2

第1章 皇族の方々のご来臨 4
ご訪問日の順にご紹介

天皇皇后両陛下 愛子内親王殿下
秋篠宮皇嗣妃殿下 高円宮妃殿下

第2章 三つのゾーンで 14

みんなが感じた「赤十字」

ゾーン1 すべての人に、それぞれの日常。 16

ゾーン2 人間を救うのは、人間だ。 20

ゾーン3 誰かのために、行動する。 30

岡山晃久／山田一郎／齊藤彰彦／菅井智
川瀬佐知子／藤田彩加／千葉梨沙／大林武彦

第3章 万博の184日 35

土橋明子／橋本明乃

第4章 万博から創立150周年へ 44

日本赤十字社副社長 鈴木俊彦

赤十字。パビリオンの来館者と
スタッフから寄せられたアンケートより 46

コラム

上皇后陛下のご発言をきっかけに、

日本で開催される万博では初めての赤十字パビリオンが誕生

日本赤十字社発祥の原点は万博にあり

SHOP 赤十字グッズ販売

赤十字関連イベント

赤十字ボランティアの皆さん 森木知津子／安井優／阪口眞治／足立則子ほか

9つの事業

12
13
34
42
56
62



2025年に開催された大阪・関西万博で、日本赤十字社は赤十字のパビリオン「国際赤十字・赤新月運動館」の企画・運営を担いました。4月13日から10月13日までの開催期間中に、31万人を超える来館者をお迎えし大盛況のうちに幕を閉じました。来館者の皆様に、「苦しみの中にもいるものは区別なく救う」という赤十字の理念、その理念を受け「いかなる状況下でも人間のいのちと健康、尊厳を守る」とした日本赤十字社の使命と活動を知っていただき、またSNSなどを通じて多くの共感と励ましの言葉を賜りましたことは、私どもにとって大変に嬉しく、有り難いことでありました。

このように来館者から共感や励ましをいただいた大きな理由は、私たちのパビリオンの持っていた二つのユニークな特徴にあったと考えています。一つは美しい未来像を描くといった趣向をあえてとらず、むしろ国の内外で起きている厳しい人道危機の現実に向け、それに赤十字はどのように立ち向かっているのかを、現場で活動する当事者の言葉と実映像で示したことです。中東での武力紛争、阪神・淡路大震災、東日本大震災などを経験した日赤看護師や支部職員の語る悲惨な実態、それに十分対応できなかったもどかしさなどは臨場感をもって伝わってきました。そしてそれでも、できる限りの救援、救護を行うなかで、「人間を救うのは人間しかいない」という確信を抱いたという言葉、「すべての患者を受け入れる」決意を掲げ続けた赤十字病院の擦り切れた赤十字旗は、心に染みるUruさんの歌とともに来館者の皆さんに希望を与え、自分にできることは何かを深く考え、次の行動を起こすきっかけを提供できたと思います。

もう一つ、私たちのパビリオンの大きな特徴は、その運営スタッフ全員が、全国から集まった日本赤十字社の職員とボランティアであったということです。ごちなさはあったとしても、一人一人自分の思いを込めて赤十字の理念や活動について説明し、誠心誠意、皆様をお迎えしました。館内は三つのゾーンから成り、二つのゾーンを見ていただいた後、最後のゾーンで来館者の感じたことをメッセージとして投稿できる場を設けました。そのメッセージや、さらにまた来館後にお

はじめに



願いしたアンケートには、そういった、いわば手作りの温かみのある運営がよかったという声を数多く寄せていただきました。

日本赤十字社は2027年に創立150周年を迎えます。万博の成果は、150周年を期して将来に向けて日本赤十字社をさらに発展させる大切な礎にしたいと考えています。「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という使命はこの先もずっと変わりません。この変わらぬ使命を、少子高齢化という人口動態、AIに象徴される技術革新、国際紛争の多発する地政学的変化、そして自然災害を頻発化・激甚化させる地球温暖化といった構造変化のもとでも実現するために、日赤は動き続け、進化していかねばなりません。

今回の万博パビリオンの中でも強調された「人間を救うのは、人間だ。」という標語に端的に示されているように、赤十字を支えているのはその活動に参加する「人」です。少子高齢化のもとでも、日赤の使命を果たすべく活動を継続し、さらに発展させていくためには、より多くの人々の赤十字運動への参加を得なければなりません。そのためにはまず、赤十字の活動の意義や実態をよく知っていただく必要があります。万博を起点に、運動体としての赤十字の理念と活動を、もともと多くの皆様と共有し、より大きく強固なものにしていければと願っています。

今回刊行する冊子は単に万博の記録にとどまらず、きたる創立150周年の節目に向けて、私たちが何を学び、どのように進化すべきかを示す道標となればと考え、制作したものです。万博で得た経験、築いた絆、そしてパビリオンで新たに出会った皆様からいただいた温かなご声援を糧に、日本赤十字社はこれからも、「苦しんでいる人を救いたい」という皆様の思いを実現するために動き続けてまいります。今後も赤十字運動への御参加並びに力強いお支えを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

令和八年三月

日本赤十字社社長 清家篤

第1章

行幸啓・お成り

皇族の方々の
ご来臨

来館者や特設WEBサイトへの訪問者がメッセージを寄せる「メッセージウォール」をご覧になる天皇皇后両陛下。右端は清家篤社長、その左は赤十字パビリオンの岡山晃久館長。

両陛下をはじめ、皇族の方々が
国際赤十字・赤新月運動館を
ご視察になりました。
ご訪問日の順にご紹介します。

日本赤十字社と皇室のゆかりは深く、
多くの皇族の皆様が赤十字の活動をお支えくださっています。
大阪・関西万博の国際赤十字・赤新月運動館
(通称・赤十字パビリオン)にも、
天皇皇后両陛下をはじめとする皇族の方々がご来臨なさいました。
ここでは、案内役を務めた赤十字パビリオン館長に
ご視察になった日付順に、それぞれのご様子と
印象に残ったお言葉についてうかがいました。



両陛下が携わってこられた
赤十字の活動



2016年7月7日、都内で開かれた献血運動推進全国大会にご臨席なされた両陛下。当時は皇太子同妃両陛下で名誉副総裁をお務めになっていました。



2025年5月13日、全国赤十字大会で有功章をご授与なさる名誉総裁の皇后陛下。



上・大阪・関西万博の開会式にご臨席になった両陛下。
下・開会式で披露されたパフォーマンス。

温かなお言葉を賜り
赤十字活動の使命を新たに

天皇皇后両陛下は大阪・関西万博の開幕前日である2025年4月12日、赤十字パビリオンをご視察になりました。清家篤社長、鈴木俊彦副社長とともに両陛下をお迎えした赤十字パビリオンの岡山晃久館長は、数多くのパビリオンの中から栄えある視察先に選ばれた喜びと緊張感を持って案内役を務めたと振り返ります。

まずパネルで会場構成を説明後、ゾーン1、2、3の順にご案内。天皇陛下は「今回のパビリオンを見て、改めて赤十字の活動に感銘を受けました。このパビリオンをより大勢の方に見ていただくことによって、赤十字の活動への理解を深められることと思います」とお述べになり、皇后陛下も「とても感銘を受けました。制作にあたり、ご苦労されたのではないですか」と職員をねぎらわれました。

岡山館長は、日本赤十字社の名誉総裁である皇后陛下だけでなく、天皇陛下の赤十字事業に対する深いご理解とご支援の御心をありがたく感じたと語ります。両陛下は皇太子同妃両陛下時代から、全国の被災地に駆けつけられ、献血運動推進全国大会にご臨席になるなど、赤十字の活動を長年支えてこられました。「赤十字の使命をこれだけ端的に表した場ができたのだから、一人でも多くの人々に知ってほしいというお気持ちも、お言葉の端々に滲んでいるようでした」と岡山館長。準備の苦労が報われ、今後約半年間、赤十字の使命をより多くの皆様にご伝え、赤十字運動への参加を呼びかけていこうという思いを新たにす幕開けとなりました。



赤十字パビリオン入口で出迎えた鈴木俊彦副社長と挨拶を交わされる両陛下。

両陛下お揃いで
赤十字パビリオンをご視察になり
職員をねぎらわれました。



ZONE1入口。

天皇陛下（4月12日）
「このパビリオンをより大勢の方に見ていただくことにより、赤十字の活動への理解を深められることと思います」

皇后陛下（4月12日）
「とても感銘を受けました。制作にあたり、ご苦労されたのではないですか」



世界中の苦しみと向き合う赤十字の活動に
温かい御心を重ねられて。

ZONE3のメッセージウォール前で岡山館長と会話を交わされるご様子。
愛子内親王殿下は「とても多くの方が、何気ない日常を大切にしていかなければならないという意味のメッセージを
寄せられているのですね」とお述べになりました。右端は清家社長、左端は鈴木副社長。

会場構成と青少年赤十字の態度目標
「気づき・考え・実行する」との
符合をいち早くご察知

万博開幕後の5月8日、パビリオンの入口前で大勢のギャラリイが出迎えるなか、敬宮愛子内親王殿下が赤十字パビリオンをご訪問になりました。愛子内親王殿下は現在、嘱託職員として日本赤十字社の青少年・ボランティア課に勤務なさっていますが、この日は皇室のご活動の一環としてのご視察。清家社長、鈴木副社長らとにこやかに挨拶を交わされた後、三つのゾーンを順にご覧になりました。

岡山館長によれば、メインシアターに着席されるとすぐに、三つのゾーンのテーマが青少年赤十字の態度目標と一致していることにお気づきになり、「気づき、考え、実行する」という構成になっているのですね」と社長に声をかけられたそうです。常々ご勤務中に三つの言葉を目になさっているからこそ、いち早く察知されたのでしょうか。また、シアターでの映像をご鑑賞後は「映像や音楽とともに実際体験をされた方の声が入っていることで、よりいっそう感じ入るものがありますね」と話され、その後の懇談では「改めて赤十字の任務の重要性と崇高さを感じました」とお述べになりました。

一つ一つのご発言に赤十字の一職員としての視点が感じられ、スタッフ一同、温かな気持ちになったと岡山館長は言います。

愛子内親王殿下（5月8日）

「改めて赤十字の任務の重要性と崇高さを感じました」



2025年5月8日、赤十字パビリオンをご視察になる愛子内親王殿下。



上・ZONE1の映像を鑑賞される高円宮妃殿下。
下・高円宮妃殿下が熱心にご覧になったZONE3の活動紹介ウォール。

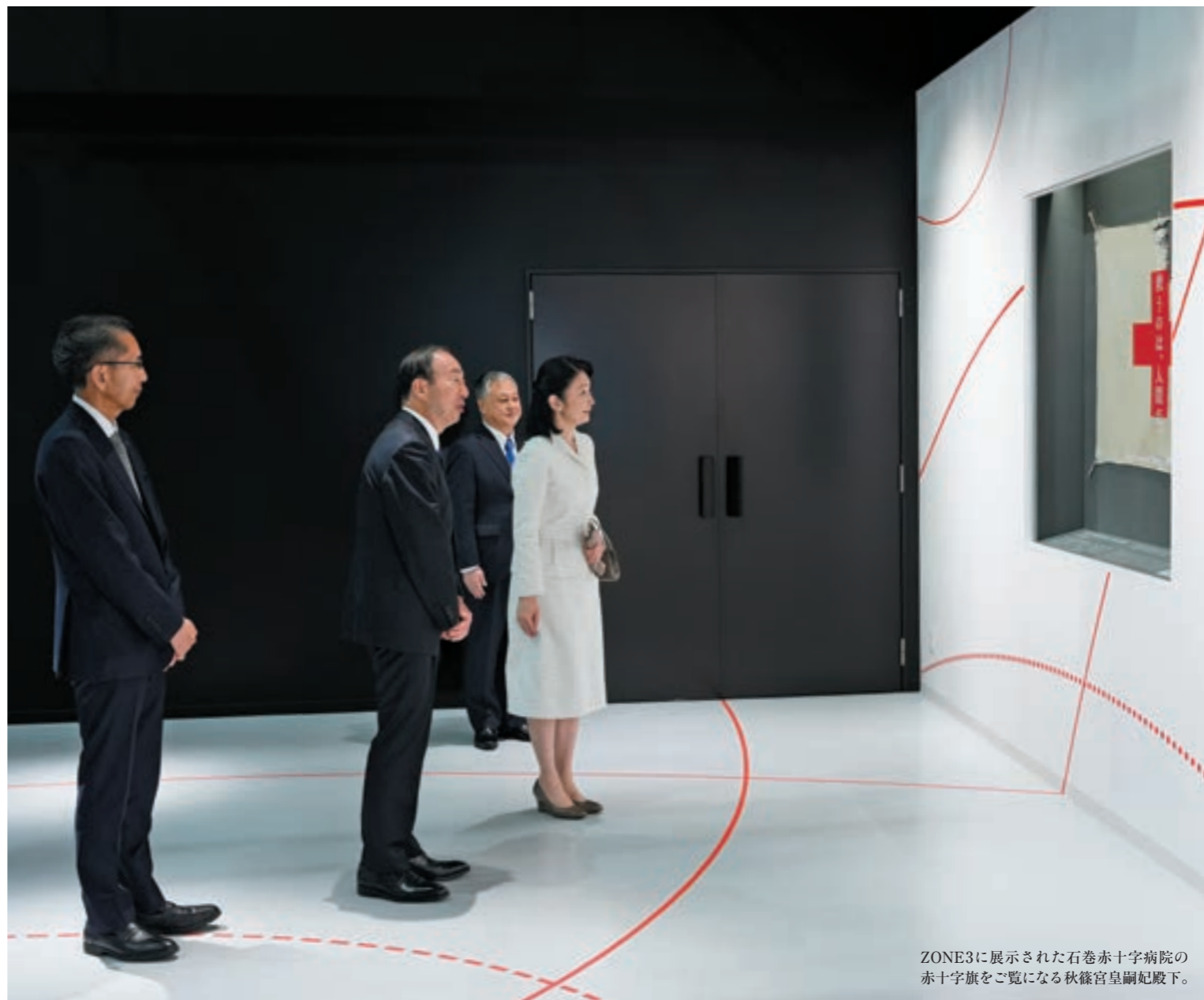
高円宮妃殿下（7月7日）
「平和な世界をめざして
ともに活動していきましょう」

三つのゾーンを熱心にご覧になり
直筆で英語のメッセージもご投稿

会期中、万博会場を複数回ご訪問になり、多数のパビリオンを精力的に視察された高円宮妃殿下。7月7日、この日最初のご視察先として赤十字パビリオンにお運びくださいました。

ゾーン2のメインシアターにご着席いただいた後、準備の関係で始まるまでに普段より長い間が生じてしまいました。しかし、「妃殿下はそのような折にも笑顔をお見せいただき、ウィットに富んだ会話でその場を和ませていただきました」と岡山館長。職員たちへのお気遣いを感じられ、とてもありがたかったと語ります。

ご多忙なスケジュールを感じさせず、三つのゾーンを熱心にご覧になった後、ゾーン3では直筆の英文で「平和な世界をめざし、ともに手を携えて活動していきましょう」という意味の力強い応援メッセージをご投稿くださったそうです。



ZONE3に展示された石巻赤十字病院の赤十字旗をご覧になる秋篠宮皇嗣妃殿下。

秋篠宮皇嗣妃殿下（5月22日）
「ご自身やご家族が被災しているなかで、
病院に詰められて医療救護にあたられたというのは、
大変尊いことですね」



東日本大震災の折、石巻赤十字病院に1カ月間掲げられ続けた旗。半分擦り切れているのは、風雪にさらされたため。

石巻赤十字病院の旗を前に
救護する側に心を寄せられて

秋篠宮皇嗣妃殿下は5月22日、赤十字パビリオンをご訪問になり、熱心にご覧いただきました。なかでも時間をかけてご覧になったのが、ゾーン3の石巻赤十字病院の赤十字旗です。当病院は東日本大震災後100日間で1万8000人以上の患者を受け入れたことで知られ、風雪にさらされて半分が擦り切れたこの旗はいのちを守る「最後の砦」としての赤十字の決意を示す象徴となりました。

その旗にまつわるエピソードをご紹介し、病院が多くの被災者であふれ返っていた状況をご説明すると、ずっとうなずきながらお聞きになっていた秋篠宮皇嗣妃殿下はおもむろに「ご自身やご家族が被災しているなかで、病院に詰められて医療救護にあたられたというのは、大変尊いことですね」とおっしゃったそうです。

「被災者の方々だけでなく、救護にあたる赤十字の職員に思いを馳せられ、お気遣いいただいたことに感銘を受けました」と岡山館長。普段から日本赤十字社のさまざまな行事にご臨席になり、その活動をお支えくださっている秋篠宮皇嗣妃殿下ならではの言葉といえるでしょう。



日本赤十字社と2005年愛知万博
**上皇后陛下のご発言をきっかけに、
 日本で開催される万博では
 初めての赤十字パビリオンが誕生**



愛知万博の開会式にご臨席なされた両陛下。

Mr・Childrenの
 曲とともに
 流れる映像が話題に

1998年、上皇上皇后両陛下（当時
 は天皇皇后両陛下）はリスボン万博をご
 視察になりました。帰国後、上皇后陛下
 は万博に関する資料や情報を日本赤十字
 社にお寄せくださり、その際、パリ万博
 と日本赤十字社誕生の関わり（左ページ
 参照）にも触れられ、当時の藤森昭一社
 長に対し、今後、日本の万博への出展予
 定はないかとご質問になったそうです。

その後、2005年に開催される愛知
 万博（愛・地球博）に、日本で開かれる
 万博では初めて、赤十字が出展する計画
 が持ち上がりました。赤十字パビリオン
 は上皇后陛下のお気持ちも後押しになっ
 て生まれたものだったといえます。
 パビリオンではメインシアターでの映



上・愛知万博「国際赤十字・赤新月パビリオン」の外観。
 下・パビリオン内のメインシアターに通じるギャラリゾーン。

像やギャラリゾーンの展示などを通
 じ、紛争地や被災地の過酷な現実の中
 もたくましく生きる世界の人々の姿と、
 彼らの苦しみを救おうと立ち向かう赤十
 字の活動を伝えました。映像とともに流
 れるMr・Childrenの楽曲「タ
 ガタメ」も話題を呼び、予想をはるかに
 上回る数多くの観客を動員。連日、長い
 行列ができました。
 20年ぶりに大阪・関西万博に出展され
 た赤十字パビリオンの来館者の皆さんか
 らも、「20年前の愛知万博で感銘を受け
 たので、今回も必ず行きたいと思ってい
 た」あの曲を今でも鮮明に覚えていま



万博と赤十字の歴史を振り返る
**日本赤十字社発祥の原点は
 万博にあり**

敵味方の区別なく救う
 という理念に
 衝撃を受けた佐野常民

日本赤十字社の誕生は、創設者である
 佐野常民が1867年のパリ万博を訪れ
 たことがきっかけです。会場には江戸幕
 府、薩摩藩とともに出展した佐賀藩の藩
 士、佐野の姿がありました。

この万博には1863年に発足したば
 かりの国際赤十字がフランスの有志や福
 祉団体とともに出展。医療器具や救急搬
 送用の馬車などのほか、国際条約や活動
 のしくみが紹介されました。アンリー・
 デユナンが提唱した「敵味方の区別なく
 救護する」という革新的な人道の考え方
 に触れた佐野は、衝撃を受けました。

その後、佐野は明治政府の代表として
 1873年のウィーン万博にも派遣され
 ます。この万博には諸事情から国際赤十
 字は出展していませんでしたが、会場内

のあらゆる場所に、赤十字に賛同する先
 進国が最先端の救護資器材をこぞって展
 示。その多くに付された赤十字マークを
 見た佐野は、ヨーロッパにおける赤十字
 運動の急速な発展を実感しました。

1877年、西南戦争で多くの若者が
 無残な死を遂げる様子が報道されると、
 佐野は敵味方の区別なく戦場の負傷兵を
 救護すべく、有栖川宮熾仁親王に嘆願し、
 日赤の前身である博愛社を設立しました。
 1882年の社員総会で佐野はこう述
 べています。

「文明開化といえは、人はみな法律がで
 きること、精密な機械ができることなど
 と言うが、私はそれだけだとは思わない。
 赤十字のような活動が盛んになることを
 もって、文明開化の証しとしたい」

万博によって世界に触れ、開明的な視
 点を得た佐野が、「人道」を重んじる真
 の近代化への一歩を歩み始めた瞬間でし
 た。



上・パリの絵入り週刊紙に掲載された赤十字パビリオン。
 下左・同じく絵入り週刊紙に掲載されたパリ万博会場のイラスト。
 下右・ウィーン万博の頃の佐野常民。

上・パリ万博に展示されたイタリア製の救急馬車。
 下・第1回赤十字国際会議報告書に掲載された、
 負傷者移送の図。



第2章

三つのゾーンで みんなが感じた 「赤十字」

スローガン「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」を掲げ、「気づく」「考える」「実行する」の三つのゾーンでの体験を通じて、人道危機の厳しい現状を知り、自分に何ができるかを考えるきっかけとなる場をめざしてつくられた赤十字パビリオン。その全貌と各ゾーンの見どころをご紹介します。



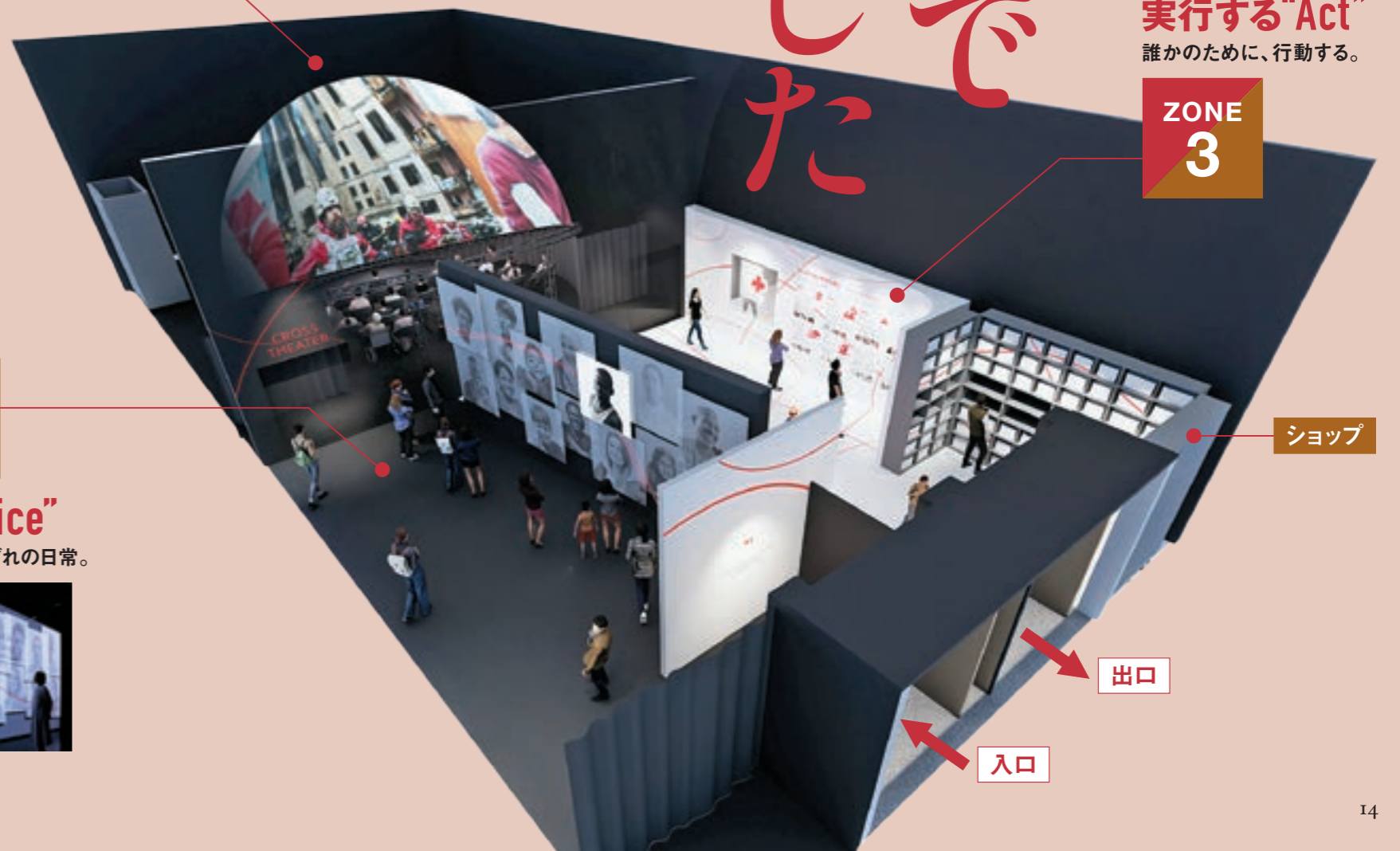
実行する“Act”
誰かのために、行動する。

ZONE 3

ショップ

出口

入口



赤十字パビリオン外観。



入口右手の壁面にはスローガン「人間を救うのは、人間だ。」と、国内外の紛争や災害の現場で救護活動を行う赤十字スタッフの写真が掲げられました。



赤十字パビリオン館長
岡山晃久

「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」を出演スローガンに、自分にできることを考える場をめざす

2005年、日本赤十字社が愛知万博に出展し、大きな反響を呼んだ「国際赤十字・赤新月運動館」。それから20年のときを経て大阪・関西万博に再び出展することが決まり、数年がかりで企画・制作に取り組んできました。スマートフォン普及で、常時個人と世界がつながり、あらゆる情報が簡単に手に入る時代に、どのような展示であれば来館者の心に響



考える“Think”
人間を救うのは、人間だ。

ZONE 2

ZONE 1

気づく“Notice”
すべての人に、それぞれの日常。



くのか、試行錯誤を繰り返しました。その中でテーマとして選んだのが、赤十字の原点に立ち返る「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」です。

来館される皆様がいのちの尊さや日常のかけがえのなさを改めて感じ、自分ができることを考える場をめざしました。

そこで、パビリオンでは単に人道危機の現状を知るだけでなく、自分に何ができるかを深く考えるきっかけとなるよう、「気づく」「考える」「実行する」という3つのゾーンを順に体験する構成としました（この3つは日本赤十字社の青少年赤十字の態度目標でもあります）。まずゾーン1では、世界中の人々の何気ない日常を映像で見ること、平穏な日常の大切さを感じ取っていただきます。続くゾーン2ではその日常が紛争や災害で突如奪われる厳しい現実とそれに立ち向かう人々の姿を、臨場感のある半球型のド

ムシアターで鑑賞。最後のゾーン3には、ゾーン1と2で感じた思いを投稿できる大型スクリーン（メッセージウォール）を用意しました。

開幕前は、はたして多くの皆様に受け入れられるだろうかという思いが頭をよぎることもありましたが、開幕直後からSNS上では「今回の万博でいよいよよかった」「涙が止まらなかった」「万博来場者全員が見るべき」など高い評価を受け、想定を大きく上回る31万人以上もの方々にご来館いただくことができました。

佐野常民が日本赤十字社の前身である博愛社を創始したのは、1867年のパリ万博で見た赤十字パビリオンの「敵味方の区別なく負傷兵を救う」という理念に衝撃を受けたことがきっかけです。苦しむ人を救いたいという佐野の志が、今回の大阪・関西万博出展を通じて未来へと受け継がれていくことを願っています。



ゾーン2への序章として、世界中の人々の何気ない日常を映像インスタレーションで表現。かけがえない日常の光景と、そこで生きる人々の姿とともに、平和な日々の価値を改めて感じていただきました。

ゾーン1 日常の大切さを体感する

すべての人にも、 それぞれの日常。

ZONE1のスクリーンに映し出される世界の人々の笑顔。
14人の写真のうち、2人はZONE2の映像に登場する日本赤十字社の職員。
それ以外の大半の人々の写真は世界の赤十字が支援活動を行う紛争地や被災地で撮影したもの。
鮮やかな画像はやがて色が失われ、日常に翳りが生じることを予感させます。

世界の人々の何気ない日常を垣間見ること 当たり前前に過ぎていく平穏な日々の価値に気づく



赤十字パビリオン
副館長
山田一郎

ゾーン1は
次のメインシアターに続く
序章と位置づけ、
人間にとって大切なものは
何かを問いかける場に

赤十字パビリオンは25×12メートルの
広さの空間を三つに分け、ゾーン1、ゾ
ーン2、ゾーン3の順に約30分かけて巡
ることで、赤十字の世界観を体感してい
ただくという構成です。
喧騒に満ちた万博会場からゾーン1に
一歩足を踏み入れると、ほの暗い空間に
設置したスクリーンに世界の人々の顔が

浮かび上がります。
ここではまず、さまざまな人種、国籍
宗教の人々を映し出す約3分半の映像イ
ンスタレーションを体験。何気ない日常、
当たり前前に過ぎていく平穏な日々がい
かに尊く、かけがえのないものであるか
を再認識していただくことを意図しまし
た。華やかで楽しい他のパビリオンとは
異質かもしれませんが、静かに心を落ち
着け、自分を見つめ直すきっかけとなる
マインド・リセットの場になればと考え
たのです。

続くゾーン2のメインシアターでは、
平穏な日常を打ち砕く厳しい人道危機の
現実を描く映像が待ち受けているため、
そのプロローグという役割を担う場でも
あります。映像の最後には「かけがえの
ない私たちの日常 いつまでも続くと信
じたい」というメッセージが流れ、不穏
な予感が漂うトーンで終わります。

映し出される映像は、アジア、中東、
アフリカ、中南米、ヨーロッパなど、世
界中の人々の笑顔と平穏な日常の一コマ
です。一見穏やかな日常を送る人々に見
えますが、大半が世界の赤十字の活動地
で撮影された写真。つまり、何らかの紛
争や災害に見舞われている人々なのです。
会場ではそのような詳しい説明はあえ
てせず、それぞれの地で生きる人々の姿
とともに、平和な日々の価値を改めて感
じていただきました。

ゾーン1のキーワードは「気づく」で
すが、ゾーン1だけを体験して気づくの
ではなく、ゾーン2、ゾーン3を二巡し、
反芻することで、改めて今の自分が過ご
している日常の尊さに気づいた方が多か
ったのではないのでしょうか。赤十字、パ
ビリオンを何度も訪れた方がいらしたのは、
それをもう一度確認したいと思ってくだ
さったからではないかと考えています。



左ページ 上・前ページの笑顔のうちの一人がクローズアップされた
画像が順に映し出されます。写真はレバノンに避難するシリアの少女。
下・ZONE1の映像に見入る来館者の皆さん。

人間を 救うのは、 人間だ。

ゾーン2

人道危機に立ち向かう人の声を届ける

当たり前に来ると思ってた未来だったのに
The future I thought would come as a matter of course did not come.

人道危機の厳しい現実と
赤十字が伝えたいメッセージを
約10分間の映像コンテンツにまとめ、
没入感のあるドームシアターで上映。
海外の紛争や国内の災害を体験した
日本赤十字社の職員4人が
メッセージを語りました。

半球型のドームシアターに映し出される映像。写真は登場人物の一人、千葉梨沙看護師が東日本大震災で祖母を失った悲しみを語るワンシーン。

目の前に広がる世界の人道危機を 半球型ドームシアターで没入体験



大阪・関西万博推進室
主査
齊藤彰彦

人の行動を駆り立てるのは
実在の人の証言しかない
チーム内で意見が一致

ゾーン2には、パビリオンのメインシアターがあります。頭上に来館者を包み込むような半球型のスクリーンが広がり、臨場感のある映像と音によって、目の前の世界に入り込んだような体験ができます。約10分間の映像は、世界の紛争や災害に立ち向かう人々の姿を描くヒューマンストーリーです。

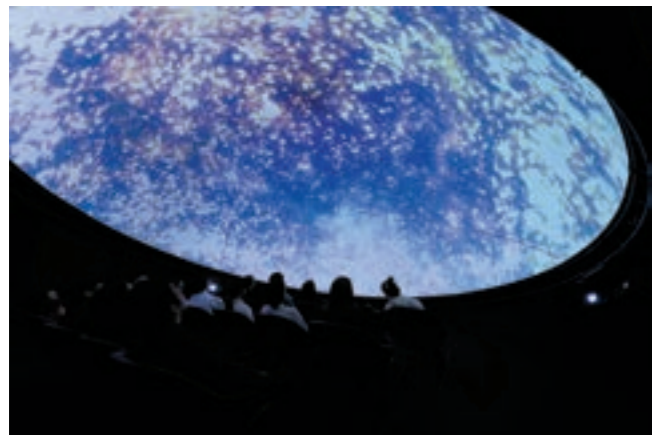
現場で活動する赤十字の視点で描か

れた映像の中には、日本赤十字社の職員によるメッセージも織り込みました。当事者の撮り下ろしインタビューを交えることで、紛争や災害のリアリティ、赤十字の使命と人間の力を感じられる映像に仕上げました。来館者の中には涙する方も少なくありませんでした。

映像をつくるにあたり、まず最初に制作チームで議論したのは、2005年に開催された愛知万博の赤十字パビリオンで上映された映像との差別化を図ることでした。話し合いを重ねるうちに、人の



半球型ドームシアターに映し出される映像を見る来館者。



約10分間の映像の一部。

関心や行動を駆り立てるのはやはり人しかいない、という考えがチーム内で生まれ、実在の「人」の証言をベースにした構成の検討が始まりました。

まず、赤十字パビリオンは「国際赤十字・赤新月運動」のパビリオンであるため、世界の紛争の中から中東地域の紛争（シリア紛争とイスラエル・ガザ紛争）に、また世界からも多くの支援が寄せられた東日本大震災に注目しました。これに加えて2025年に30年目を迎える阪神・淡路大震災も大阪で開かれる万博であることから必要不可欠と考え、これらに関わりのある人を探すことになりました。

紛争地や被災地での体験を 思いのこもった言葉で 語ってくれた4人の職員

東日本大震災で被災した石巻赤十字看護専門学校で被災者の救護に当たったことは赤十字職員の中では広く知られるエピソードです。その後看護師になった当時の学生に話を聞きたいと考え、石巻赤十字病院と石巻赤十字看護専門学校の全面的な協力を得ながら、千葉梨沙看護師と藤田彩加看護師に協力していただけることになりました。

また阪神・淡路大震災に関しては、新聞記事などを手がかりに、震災の年に日本赤十字社に入社した大林武彦職員にアプローチし、震災当時の思いを振り返り、それが今の赤十字活動にどうつながっているかを回想していただきました。

来館者には二つの震災（東日本と阪神・淡路）を経験された方が多く、当時を思い出して涙される方、気持ちを新たにされた方の声も多く聞きました。

中東紛争については、2023年10月のイスラエル・ガザでの武力衝突直後に現地から帰国した川瀬佐知子看護師にアプローチしました。「国際赤十字・赤新月運動」のパビリオンとしては、華やかな平和の祭典である万博という場で現在進行形の人道危機の実態を知ってもらうことも、今回の万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に必要な視点と考え、現地でのリアルな経験を語ってもらいました。

それぞれの語りは一人一人異なる固有のものですが、すべてに共通するのは、場所や時代は変わっても、「人間を救うのは、人間だ。」という人間なら誰しもが持つ人道の心を、それぞれの実体験を踏まえた「思いのこもった」言葉で語っていた点です。こうした思いが万博が終わった後も広く受け継がれていくことを強く願っています。

イスラエル・ガザ紛争

これが現実かと思うほどの悲惨な状況でも
私たちがあきらめてはならない

ゾーン2の映像に登場した 川瀬佐知子看護師（大阪赤十字病院）



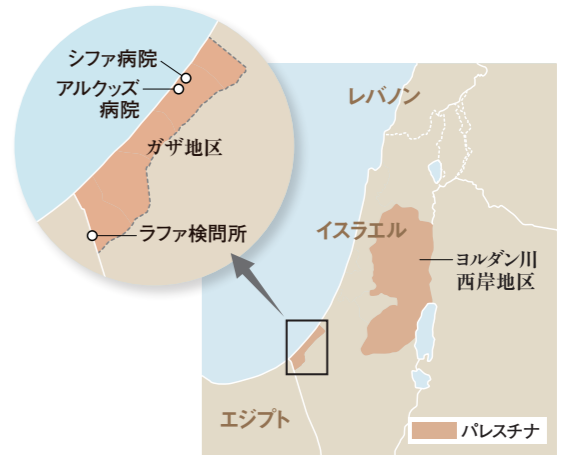
医師のもとに
運び込まれた患者は
すでに亡くなった
わが子という悲劇

日本赤十字社は、国際赤十字のネットワークを通じて、全国の赤十字施設から医師や看護師をはじめとするさまざまな職種のスタッフを「国際要員」として世界の紛争地域や被災地に派遣しています。現在、大阪赤十字病院に勤務する川瀬佐知子看護師もそんな国際要員の一人で、これまでにジンバブエ、バングラデシュ、ハイチ、ネパールなどで国際救援活動に従事してきました。2023年7月からはパレスチナ・ガザ地区にあるアルクツズ病院に派遣され、看

護の指導を行うなど、医療支援事業に従事。しかし、同年10月7日、ガザでの武力衝突に遭遇しました。ゾーン2ではそのときの様子が生々しく語られました。

「数え切れないくらいの負傷者が運ばれてきて、同僚の医師が救急外来で患者さんを見たら、それが自分のお子さんだと気づいたよ。うで、一人はすでに亡くなられていて、もう一人は重傷でした。そのような状況を目の当たりにして、本当にこんな辛いことってあるのかなと……」

砲火が飛び交い、身の危険を感じるなか、より安全な場所へ避難しながら救援活動が続けていたが、攻撃の激化から同年11月5日にやむなく帰国。ガザに残り24



時間体制で医療活動続ける現地のスタッフに対し、映像中では「希望を持ってほしい」とはとも「言えない」と涙ぐんだ川瀬看護師ですが、その後ガザから届いたメッセージの中に「私たちは決してあきらめない」という一文を発見したそうです。

「まさかそんな『あきらめない』という言葉が出てくるとは思っていませんでした、すごく驚きましたし、ここにいる私も絶対あきらめたらあかん、日本でこそできる支援を続けていかなあかと自分で感じました」

武力衝突以降の死者数は7万人

を超え、停戦合意発効後もその数は増え続けています。また、食料、医療品、燃料などの不足が今なお深刻で、多くの人々が引き続き人道支援を必要としています。「自分のできることは、ガザの現状を伝えること」と語る川瀬看護師は、今も大阪赤十字病院の病棟で看護師として勤務する傍ら、国際要員としての活動を続けています。

今の私にできるのは、
ガザの現状を伝えること。
この瞬間も
犠牲者は増え続けている。



上右・武力衝突前のガザの平穏な風景。上左・武力衝突前に川瀬看護師が行っていた看護ケア研修の様子。中右・爆撃で負傷した救急隊員の処置に当たる現地看護師。中左・南部の避難民キャンプの様子。下右・キャンプではゴミが処理されず衛生状態が悪化。下左・紛争で両足を失った男性と、その車椅子を押す幼い娘。希望を捨てていない意志が伝わってきます。

東日本大震災

自分も被災しながら、仲間の看護学生とともに被災者の命を支える

ゾーン2の映像に登場した 藤田彩加看護師と千葉梨沙看護師 (石巻赤十字病院)



藤田彩加看護師

津波で濡れた被災者を救おうと教室のカーテンでくるんで保温

石巻赤十字看護専門学校は現在、内陸部にあつて津波による浸水被害を免れた石巻赤十字病院の敷地内に併設されていますが、東日本大震災以前は海から約1・5キロメートルの位置にありました。2011年3月11日の地震発生時、3年生は卒業済みで、校舎内には1・2年生の学生約80人と十数人の職員がいました。揺れが収まった後、近くの指定避難所の湊小学校に避難を開始。津波が背後まで迫り、小学校も1階の天井まで浸水しましたが、なんとか全員



震災直後の湊小学校周辺(上)と校舎内(下)。津波のすさまじさが伝わってきます。

誰かが何かをしなければ、一度は助かった命が失われてしまう。

相手の気持ちを想って声をかけることができるのは、人間しかないと思います。



千葉梨沙看護師

無事に避難することができました。

湊小学校には他にも大勢の住民が次々避難してきて、ピーク時には1200人近くに上り、怪我をしている人や津波にのまれて全身が濡れている人、お年寄りや体が不自由な人もいました。そこで、教職員と学生たちは自分たちも被災者でありながら、救助が来るまでの数日間、24時間交代で避難者たちを献身的に支えたのです。まさに、いかなる状況下でも苦しむ人を救うという、赤十字の理念を体現した行動といえるでしょう。

ゾーン2の映像に登場した藤田彩加看護師と千葉梨沙看護師はそのときの学生で、卒業後、石巻赤十字病院に勤務しています。今回、そのときの経験をときには涙を浮



震災直後の石巻赤十字看護専門学校内部。

かべながら語ってくれました。藤田看護師によれば、校内には限られたものしかないため、教室のカーテンをはずし、津波で濡れた人たちをくるんで温めていたそうです。「誰かが何かをしなければ、一度は助かった命が失われてしまう。でも、できないことも多くあつて、自分の無力さを痛感しました」二人とも当時はまだ学生で、かつ自身も被災者でありながら、多くの被災者を目の当たりにし、厳しい状況の中で「自分たちにでき

ることがあるのではないか」という気持ちを貫き、被災者に寄り添い続けました。こうした経験は今も「看護師として働くうえで大きな力になっている」と語っています。映像は千葉看護師の「相手の気持ちを想って声をかけることができるのは、人間しかないと思っています」という言葉で締めくくられています。

震災の翌年の卒業式で読まれた答辞。湊小学校での避難活動の思い出が綴られています。現在、日本赤十字社の史料として保管されており、赤十字WEBミュージアムでも公開されています。



阪神・淡路大震災

被災地で味わった無力感から
人を救う仕事に就きたいと決意

ゾーン2の映像に登場した大林武彦職員（日本赤十字社香川県支部）



震災の記憶を胸に
活動の最前線に
立ち続ける

日本赤十字社香川県支部事業推進課課長の大林武彦職員が阪神・淡路大震災を経験したのは、大学4年生のとき。兵庫県尼崎市出身の友人の実家が被災したことを知り、神戸を訪れました。

そのとき目にした神戸の街並みは自分の記憶にあるものとはまったく違っており、すべての建物や家々が潰れていた光景に衝撃を受けたと言います。何か手助けができないかと友人を訪ねたものの、具体的な行動までには至らなかった当時の気持ちを、映像中では次のように回想しました。



地震による火災で、骨組みだけを残してアーケードが無残に焼け落ちた、神戸市長田区の菅原商店街。

「惨状を目の前にしても、実は何もできていなかったんです。片づけを手伝うこともなく、また、ボランティア活動にも参加しませんでした。何もしていない、何もできていないじゃないかと、後ろ

めたい気持ちがあふれ返ったのを覚えています」

こうした気持ちを抱いた大林職員は、「人を助ける仕事に就きたい」と決意し、すでに決まっていた内定先の企業を辞退し、日本赤



右・三角巾を使った傷の手当てを指導。身近なもので実践できるため、災害時にも役立つ人気の講習です。
左・香川県支部が毎年、さぬき市・津田の松原海水浴場で実施している水上安全法救助員養成講習。海やため池が多い本県での水辺の事故防止といのちを守る力の向上をめざしています。



いのちを守るために「今備える」ことの大切さを伝える赤十字防災セミナー。地域の子どもから大人まで、実践的な備えを学んでいます。

十字社に入社。それ以来、国内の災害救護活動、人のいのちと健康を守るための講習やセミナーの普及などに従事し、今も人を救う活動の最前線に立ち続けています。映像中では次のようにも語っています。

「（阪神・淡路大震災の）当時の自分にもし声をかけられるんだったら、『できること、あるでしょ？』『できること、やったら？』ということを言いたいですね。そのときしかできないことがありますので」

来館者には阪神・淡路大震災（また東日本大震災も）を経験した方も多く、「私もあのとき何もできなかった。何かできたのではないかと今でも思います」「一人ひとりが小さなことから始めれば、何か乗り越えられることがあるかもしれないと気づかされました」といった声が多く寄せられました。

あのときの自分に声をかけられるなら
「今しかできないことがある」と伝えたい。



誰かのために、 行動する。

ゾーン3 自分に何ができるかを言葉にして投稿

ゾーン1と2の体験後、来館者が抱いた思いを投稿できる「メッセージウォール」を設置。その向かい側には芽生えた思いを行動に移すきっかけとして、赤十字の活動を紹介するコーナーも設けました。

人間を救うのは
人間だという言葉
がくらくときました

こ-たろ-

人の心に寄り添える
ような看護師でいられ
るように、これからも
頑張ります

Y

ぼくが
人間を
救った

たいせい

阪神大震災では多くの
人に助けていただきま
した。今度は私が恩
返しする番ですね。

あきら

南大坂で
誰かの命が
救えますように。
南大坂にきまろ

みさき

万博会場だけでなくWEBからも人道危機に対する
思いを投稿できる「メッセージウォール」。手前
にある4台の投稿台にはタブレットが組み込まれ、キ
ーボードまたは手書きの入力方式が選べます。5つ
の円の中のメッセージは実際に投稿されたもの。

赤十字の思いが伝わった コミュニケーションスペース



大阪・関西万博推進室
菅井 智

来館者と赤十字スタッフの
人道に対する思いや共感が
あふれる場に

ゾーン3に入ると、右手に縦3・5×8メートルの巨大なスクリーン「メッセージウォール」が見えてきます。手前に4台ある投稿台のタブレットを用いてメッセージを入力すると、赤い円形の枠に収められた来館者の思いがメッセージウォールに浮かび上がります。特設WEBサイトからの投稿や閲覧も可能で、会期中に投稿されたメッセージ数は9万件以上に及びました。ゾーン2での体験に背中を押され、また、深く共感して泣きながらメッセージを書く方もいらっしゃいました。左手には活動紹介ウォールを設け、「私も何かしたい」という気持ちを具体的な

人道アクションに移すきっかけとしてもらえるよう、多様な赤十字の人道活動を紹介しました。

その一角で来館者の目を引いたのがゾーン2の映像でも取り上げた、半分擦り切れた赤十字旗でした。東日本大震災発災後、被災地域の医療を一手に担った石巻赤十字病院が「すべての患者を受け入れる」という赤十字の決意の象徴として掲げ続けたもの。震災時には降納せずに1カ月間ずっと掲げられたため、風雪にさらされて右半分が失われてしまったのです。震災で被災された方など、多くの方々が自身の当時の体験を重ねて、スタッフと語り合う場となりました。

パピリオンのスタッフは全員、普段は赤十字の血液センターや病院で勤務する職員とボランティアで、全国から駆けつけました。来館者からの献血や国際活動についての質問などに対する熱心で寄り添ったスタッフの受け答えは、赤十字を身近に感じられる格好のコミュニケーションの機会でした。

会期中、メッセージウォールに書かれる



ZONE3全景。右手がメッセージウォール、向かい側の左手の壁では赤十字の多様な人道支援活動を紹介。左手前に見えるのは、東日本大震災の折に石巻赤十字病院が掲げ続けた赤十字旗。

来館者のメッセージを毎日数百件見ました。赤十字が伝える人道とは何か、その思いに共感して人はどう考え、どう新しい一歩を踏み出そうとするのか、人道アクションを広める触媒としてのこのパピリオンの成果を実感することができた6カ月間でした。赤十字の役割は、もともと人の心の中にある人道の「種」に火を付け、それが次第に燃え上がり広がっていくことを支援することであるということを再認識できた体験でした。



左ページ 上・メッセージウォールをバックに
来館者の記念写真を撮るスタッフ。
下・活動紹介ウォールについての
スタッフの説明に聞き入る来館者の皆さん。

184日 万博の

第3章

「オール赤十字」で駆け抜けた

職種、年齢、勤務施設などが異なる職員とボランティアが、全国各地からスタッフとして駆けつけ、交代しながら運営を続けた赤十字、パビリオン。いわば「オール赤十字」の力を結集することで、唯一無二のパビリオンが完成しました。ここでは、184日間のトピックスや運営の舞台裏、来館者数の推移などをたどりま。



SHOP

連日大勢の来館者で賑わい、交流の場となった

赤十字グッズ販売



「コトセン」をあしらった
万博限定の
オリジナルグッズも販売

出口近くのショップでは、赤十字と関わりのある多様な商品を販売しました。まず赤十字、パビリオンのオリジナル商品として販売したのが、「コトセン」をあしらったグッズ。コトセンとは、パビリオンの床や壁、映像の中などに用いられている赤い線を指し、人が体験したこと、何かをしようとするなど、その人が持つ「コト」の線が交わり、広がり、共鳴し合うことで大きな力となるイメージの象徴としてデザインされました。また、日本赤十字社の公式キャラクター「ハートラちゃん」グッズやムーミングッズ、ハートラちゃんとミヤクミヤクとのコラボグッズも人気を集めました。なぜムーミンと思われた方も多かったようですが、ムーミンの作者トーベ・ヤンソンと赤十字には深い関わりがあり、ヤンソンは長年、赤十字の活動を支援してきました。

ショップもまた来館者とスタッフの交流の場となりました。ゾーン2の映像の余韻が冷めやらずスタッフと話し込む方や、寄付の代わりに何か購入することでも赤十字の活動を支援したいという方が多く、連日大勢のお客様で賑わいました。



「コトセン」をモチーフにした万博限定のオリジナルTシャツ。



公式キャラクター「ハートラちゃん」をあしらったリングノート。



赤十字にゆかりのあるムーミンのマグカップ。

赤十字。パビリオンの184日

2025年4月13日～10月13日

【第1週】万博会場入口に掲揚された出展者の旗



【第3週】投稿された自分のメッセージ前での記念撮影が定番化。スタッフと来館者のコミュニケーションにもつながった



【第4週】赤十字スペシャルデーの会場。立ち見150人を含む600人の観客で埋め尽くされた



【第6週】日傘の提供を開始



【第6週】ファサードにもユスリカの大群が



【第6週】人気のオリジナルピンバッジ(完売)



第6週	第5週	第4週	第3週	第2週	第1週
5/19-5/25	5/12-5/18	5/5-5/11	4/28-5/4	4/21-4/27	4/13-4/20
5月23日(金) 5月22日(木)		5月8日(木)	4月28日(月) 5月3日(土祝) 5月4日(日祝)	4月21日(月) 4月20日(日)	4月13日(日)
<ul style="list-style-type: none"> ● ショップの万博限定グッズが人気。この日は特にショップが大賑わいに。寄付の代わりに何か購入したいという来館者が多く、パビリオンオリジナルのピンバッジやハンドタオル、ムーミンのエコバッグやマグカップが人気。 ● 10ページ参照 	<ul style="list-style-type: none"> ● 敬宮愛子内親王殿下ご視察 ↓8ページ参照 ● 「赤十字スペシャルデー」開催 ↓42ページ参照 ● スペシャルデー代表団の皆様がご来館 ● 「Urusaさんの「夜が明けるまで」がSNSで話題に ● 来館者からシアター映像で流れる楽曲のアーティスト名や曲名を尋ねられる機会が増え、情報をスタッフで共有。SNSには「夜が明けるまで」のフルバージョンを解禁してほしい」「万博会場でCDを販売してほしい」など、投稿が相次いだ。 ● この週の来館者数の合計は1万人の大会。開幕後1カ月あまりで来館者の累計総数は5万人目前 ● 夢や未来の技術を語る他、パビリオンと異なり、現実の問題に向き合う人間の姿を中心とした映像と音楽に注目が集まってくる。 ● 猛暑日が続き、この週から待機列のお客様に日傘の提供を開始 ● この週あたりから「ユスリカ」という虫の大量発生が問題に。パビリオン内に侵入した虫の駆除・清掃を開始 ● 夜になると大量発生するユスリカ。パビリオン内への侵入を防ぐため、出口にスタッフが常駐し、お客様の退場のたびに扉を開閉するように。 ● 日本赤十字社名誉副総裁、秋篠宮皇嗣妃殿下ご視察 		<ul style="list-style-type: none"> ● 「キャンセル待ち」列を新設 ● 予約枠が早々に満杯になるため、キャンセル分を効率よく予約なしの方へ回すべく「キャンセル待ち」列を新設し、希望する来館者を最大限受け入れる施策をスタート。 ● 来館者のレスポンスは日々上昇中 ● 開館以降のメッセージボードでのメッセージ投稿数が累計5000件、退館後の来館者アンケートの回答数が累計500件を記録。 ● ゴールデンウィークがスタート。語学専任からの運営スタッフ派遣、始まる ● 1日の来館者数が1486人、メッセージ投稿数も400件超と、開幕後の最高記録を更新 ● 「赤十字ウィーク」スタート (10日まで) ↓42ページ参照 	<ul style="list-style-type: none"> ● 大阪・関西万博開幕 ● 予約枠は昼過ぎには最終回枠まで一杯になるが、キャンセルも多く、予約なしの方へ振り分ける調整に追われる。全国から集まった応援の職員・ボランティアの方々は5日間交代で配置。非常に適切で丁寧な進行対応で、来館者にも好評。 ● 来館者数が10日間でのべ1万人を突破 	

第11週	第10週	第9週	第8週	第7週
6/23-6/29	6/16-6/22	6/9-6/15	6/2-6/8	5/26-6/1
6月27日(金)	6月20日(土)	6月12日(木)	6月9日(月)	5月26日(月) 6月1日(日)
<ul style="list-style-type: none"> ● 国連事務次長メリッサ・フレミング氏ご来館 ● 厚生労働大臣・福岡資麿氏ご来館 ● 1日の来館者数1700人超える ● 予約枠が午前中にすべて埋まる一方、キャンセル待ちには長い列が。シアター席のわずかな隙間に補助イスを増設するなど、行列を少しでも解消する対策を実施。 ● 「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請増える ● 蒸し蒸しする暑さのなか、体調を崩すお客様が増加。近隣、パビリオンからも「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請が増えた。水やアイスを用意し、看護師経験のあるスタッフがいる場合は応急処置も行った。 ● 「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請増える ● 蒸し蒸しする暑さのなか、体調を崩すお客様が増加。近隣、パビリオンからも「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請が増えた。水やアイスを用意し、看護師経験のあるスタッフがいる場合は応急処置も行った。 ● 気象庁が近畿地方の梅雨入りを発表。さまざまな雨対策を導入 ● 梅雨入りで万博会場全体は来場者が減るなか、当館の来館者は相変わらず予約枠オーバーの日は続く。雨天時は傘を差しながらの入館者対応や入れ替え時の座席シートの拭き上げ、濡れた床のモップがけなどを行い、来館者の安全に配慮。 ● フィンランドのストップ大統領ご夫妻ご来館 ● スイス大使ロジェ・ドゥバツハ氏ご来館 ● 「赤十字パビリオン」は皆が見たくない現実を見せてくれ、われわれに「では何をやるのか」を考えさせるメッセージを投げかけてくれた「コメント」。 ● 1日の投稿メッセージ数が502件となり、最高記録を更新 ● 1655人の来館者に対して502件のメッセージ投稿があり、約3人に1人が投稿してくれた。 ● 累計来館者数10万人目のお客様に記念品贈呈 ● 10万人目のお客様は3世代で来られた5人家族。記念品として「ハートちゃんぬいぐるみ、ムーミンのマグカップなどを贈呈。 ● 入館待ちの列に熱中症対策、大型テントと冷風機登場 ● 大阪府支部の全面的な協力により、大型テント2張り冷風機2台を入口に設置。入館待ちの来館者と入口担当スタッフの身体的負担の軽減に。スタッフには新たに毎日の設置・撤収、給水などの負担が増えたが、夏本番前のひと足早い対策は、人間のいのちと健康を守る「赤十字ミッション」の象徴として話題に。 ● 大阪は梅雨明け、本格的な夏が始まる ● 連日真夏のような暑さの中、テントと冷風機は入館待ちの方たちに好評。 ● ぴあ発行の万博ガイドの満足度ランキングで、赤十字パビリオンが15位にランクイン ● この日発売の「大阪・関西万博ぴあ・完全攻略編」が満足度ランキングを発表。万博会場来場者2000人以上への出口調査により、150人以上あるパビリオンの中から15位に選ばれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 累計来館者数10万人目のお客様に記念品贈呈 ● 10万人目のお客様は3世代で来られた5人家族。記念品として「ハートちゃんぬいぐるみ、ムーミンのマグカップなどを贈呈。 ● 入館待ちの列に熱中症対策、大型テントと冷風機登場 ● 大阪府支部の全面的な協力により、大型テント2張り冷風機2台を入口に設置。入館待ちの来館者と入口担当スタッフの身体的負担の軽減に。スタッフには新たに毎日の設置・撤収、給水などの負担が増えたが、夏本番前のひと足早い対策は、人間のいのちと健康を守る「赤十字ミッション」の象徴として話題に。 ● 大阪は梅雨明け、本格的な夏が始まる ● 連日真夏のような暑さの中、テントと冷風機は入館待ちの方たちに好評。 ● ぴあ発行の万博ガイドの満足度ランキングで、赤十字パビリオンが15位にランクイン ● この日発売の「大阪・関西万博ぴあ・完全攻略編」が満足度ランキングを発表。万博会場来場者2000人以上への出口調査により、150人以上あるパビリオンの中から15位に選ばれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 気象庁が近畿地方の梅雨入りを発表。さまざまな雨対策を導入 ● 梅雨入りで万博会場全体は来場者が減るなか、当館の来館者は相変わらず予約枠オーバーの日は続く。雨天時は傘を差しながらの入館者対応や入れ替え時の座席シートの拭き上げ、濡れた床のモップがけなどを行い、来館者の安全に配慮。 ● フィンランドのストップ大統領ご夫妻ご来館 ● スイス大使ロジェ・ドゥバツハ氏ご来館 ● 「赤十字パビリオン」は皆が見たくない現実を見せてくれ、われわれに「では何をやるのか」を考えさせるメッセージを投げかけてくれた「コメント」。 ● 1日の投稿メッセージ数が502件となり、最高記録を更新 ● 1655人の来館者に対して502件のメッセージ投稿があり、約3人に1人が投稿してくれた。 ● 累計来館者数10万人目のお客様に記念品贈呈 ● 10万人目のお客様は3世代で来られた5人家族。記念品として「ハートちゃんぬいぐるみ、ムーミンのマグカップなどを贈呈。 ● 入館待ちの列に熱中症対策、大型テントと冷風機登場 ● 大阪府支部の全面的な協力により、大型テント2張り冷風機2台を入口に設置。入館待ちの来館者と入口担当スタッフの身体的負担の軽減に。スタッフには新たに毎日の設置・撤収、給水などの負担が増えたが、夏本番前のひと足早い対策は、人間のいのちと健康を守る「赤十字ミッション」の象徴として話題に。 ● 大阪は梅雨明け、本格的な夏が始まる ● 連日真夏のような暑さの中、テントと冷風機は入館待ちの方たちに好評。 ● ぴあ発行の万博ガイドの満足度ランキングで、赤十字パビリオンが15位にランクイン ● この日発売の「大阪・関西万博ぴあ・完全攻略編」が満足度ランキングを発表。万博会場来場者2000人以上への出口調査により、150人以上あるパビリオンの中から15位に選ばれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 国連事務次長メリッサ・フレミング氏ご来館 ● 厚生労働大臣・福岡資麿氏ご来館 ● 1日の来館者数1700人超える ● 予約枠が午前中にすべて埋まる一方、キャンセル待ちには長い列が。シアター席のわずかな隙間に補助イスを増設するなど、行列を少しでも解消する対策を実施。 ● 「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請増える ● 蒸し蒸しする暑さのなか、体調を崩すお客様が増加。近隣、パビリオンからも「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請が増えた。水やアイスを用意し、看護師経験のあるスタッフがいる場合は応急処置も行った。 ● 「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請増える ● 蒸し蒸しする暑さのなか、体調を崩すお客様が増加。近隣、パビリオンからも「赤十字マーク」を頼りに、救護や迷子保護依頼の要請が増えた。水やアイスを用意し、看護師経験のあるスタッフがいる場合は応急処置も行った。 ● 気象庁が近畿地方の梅雨入りを発表。さまざまな雨対策を導入 ● 梅雨入りで万博会場全体は来場者が減るなか、当館の来館者は相変わらず予約枠オーバーの日は続く。雨天時は傘を差しながらの入館者対応や入れ替え時の座席シートの拭き上げ、濡れた床のモップがけなどを行い、来館者の安全に配慮。 ● フィンランドのストップ大統領ご夫妻ご来館 ● スイス大使ロジェ・ドゥバツハ氏ご来館 ● 「赤十字パビリオン」は皆が見たくない現実を見せてくれ、われわれに「では何をやるのか」を考えさせるメッセージを投げかけてくれた「コメント」。 ● 1日の投稿メッセージ数が502件となり、最高記録を更新 ● 1655人の来館者に対して502件のメッセージ投稿があり、約3人に1人が投稿してくれた。 ● 累計来館者数10万人目のお客様に記念品贈呈 ● 10万人目のお客様は3世代で来られた5人家族。記念品として「ハートちゃんぬいぐるみ、ムーミンのマグカップなどを贈呈。 ● 入館待ちの列に熱中症対策、大型テントと冷風機登場 ● 大阪府支部の全面的な協力により、大型テント2張り冷風機2台を入口に設置。入館待ちの来館者と入口担当スタッフの身体的負担の軽減に。スタッフには新たに毎日の設置・撤収、給水などの負担が増えたが、夏本番前のひと足早い対策は、人間のいのちと健康を守る「赤十字ミッション」の象徴として話題に。 ● 大阪は梅雨明け、本格的な夏が始まる ● 連日真夏のような暑さの中、テントと冷風機は入館待ちの方たちに好評。 ● ぴあ発行の万博ガイドの満足度ランキングで、赤十字パビリオンが15位にランクイン ● この日発売の「大阪・関西万博ぴあ・完全攻略編」が満足度ランキングを発表。万博会場来場者2000人以上への出口調査により、150人以上あるパビリオンの中から15位に選ばれた。 	



【第11週】「大阪・関西万博ぴあ・完全攻略編」の掲載ページ。右上が15位の赤十字パビリオン



【第10週】夏本番前に登場した入館待ち列の暑さ対策のテントが赤十字の象徴だと話題に



ご来館10万人目のお客様



【第9週】フィンランドのストップ大統領ご夫妻ご来館



【第9週】雨天時のパビリオン前



【第7週】国連事務次長メリッサ・フレミング氏ご来館



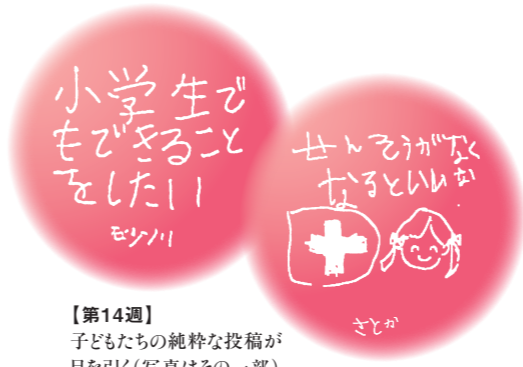
【第17週】「Time For Peace」のトークセッションに登壇した日本赤十字社ウクライナ現地代表部主席代表の芳原みなみ職員



【第16週】ZONE3の展示を見るリヒテンシュタイン赤十字社事務総長



【第15週】猛暑で冷風機に補給する水をバックヤードから運搬する回数も増えるばかり



【第14週】子どもたちの純粋な投稿が目を引く(写真はその一部)



【第14週】夏休みで子ども連れファミリーが増加



【第13週】雷雲発生時、運営を一時中断し、館内に大勢のお客様に待避していただいたときの様子

第17週 8/4-8/10	第16週 7/28-8/3	第15週 7/21-7/27	第14週 7/14-7/20	第13週 7/7-7/13	第12週 6/30-7/6
8月10日(日)	8月3日(日)	7月23日(水)	7月20日(日)	7月7日(月)	7月3日(木)

●ミヤクミヤクとのコラボ商品発売。大人気に
ミヤクミヤクとハートちゃんのコラボ商品が新発売。初日だけでピンバッジが500個以上売れた。

★雷雲警報により館内を待避スペースとデリラ豪雨や雷など、悪天候が続く。雷雲による警報が発令された際には、運営を一時中断して多くのお客様を誘導し、館内に待避していただいた。

●高田宮妃殿下ご視察
↓11ページ参照

●開館から3カ月。折り返し地点に
土日の両日にはブルーインパールの展示飛行が披露され、中断していた人気の水上ショーが再開されたこともあり、万博会場全体が活気にあふれた。

●夏休みに入り、子ども連れの家族が増加。1日の来館者数が初めて18000人に

「夏休み通期バス」や花火大会など、万博全体で集客対策が行われるなか、当館でも子どもたちや親子連れの来館者を多く見かけるようになった。若年層へ人道の輪を広げるチャンスととらえ、積極的な声かけなどを心がけたこともあり、1日の来館者数が初めて18000人となった。メッセージジョーには「メッセージを書き残したい」という子どもたちの行状が、この日だけで600件もの投稿があった。

★この週、来館者アンケートの回答数が5000件を超える

●リヒテンシュタイン赤十字社事務総長ニコル・マツト氏ご来館
「映像は心に残るものだった。人々が考えるきっかけになるでしょう」とコメント。

●1日の来館者数記録更新、18233人にさらなる補助イースの活用や誘導方法のアップグレードが功を奏し、これまでの最高となる18233人の来館者数を記録。ゾーン3を中心に来館者ヒストリーの会話がたくさん生まれた。「献血について教えてほしい」「ボランティアに参加するにはどうすればいいのか」と質問する人、過去の震災体験を涙ながらに語る人、「救急法の講習を受けてみたい」「将来赤十字の仕事がしたい」と話す子どもなど。真摯に対応する赤十字スタッフの存在が生きている。

★夏休みを利用した高校生や大学生のボランティアが増える
ゾーン3での全体説明やお客様への対応など、若さとそのひたむきな姿が来館者に好印象を与え、パビリオン全体がフレッシュな雰囲気。

●万博の関連イベント
「Time For Peace」開催
万博の「平和と人権テーマウィーク」に合わせ、国連パビリオンと国際NGOピースボートの共催により、大阪港に停泊中の客船「パシフィック・ワールド号」で、レセプション「Time For Peace」を開催。トークセッションでは日本赤十字社ウクライナ現地代表部主席代表の芳原みなみ職員も登壇。現地の状況をリアルに伝えるとともに、赤十字の活動を通じて人道の大切さについてスピーチを行った。

第26週 10/6-10/13	第25週 9/29-10/5	第24週 9/22-9/28	第23週 9/15-9/21	第22週 9/8-9/14	第21週 9/1-9/7	第20週 8/25-8/31	第19週 8/18-8/24	第18週 8/11-8/17
10月13日(祝)	9月29日(月)			9月9日(火) 9月10日(水) 9月14日(日)		8月30日(土) 8月31日(日)	8月23日(土)	8月13日(水)

●地下鉄がストップ、大勢の来場者が万博会場で一夜を明かす
大阪メトロ中央線は夜9時半頃から翌朝5時半頃にかけて、設備トラブルにより約8時間、全線で運転を見合わせ、万博会場は孤立状態に。約3万人が足止めされ、大混乱となった。万博会場は翌朝まで開放され、多くの来場者が会場内で一夜を明かした。当館の運営スタッフもパビリオンで一夜を明かす事態に。それでも翌日には疲れを見せず、再びスタッフ業務に入って運営を支えてくれた。

●累計来館者数が想定より早く20万人を突破
知人から「とても感動したよ」と聞いて地元大阪からお越しになった方が20万人目に。子どもたちは「いのちの大切さがわかった」と。「子どもたちは医療系に進みたいと言っているので、いきつかけになった」とお母様。

●毎月恒例の花火大会を目当てに約17万人が万博に来場
花火大会で会場は大混雑。パビリオンにもキャンセル待ちのお客様が大勢押し寄せ、スタッフはその対応で大忙し。

●夏休み最後の週末、万博開幕後最高の来場者数を記録
会場はバンク状態となり、当館も人の波であふれ返った。

★万博×献血キャンペーンが終了
会期中に赤十字、パビリオンに来館後近畿2府4県の献血ルームで献血した人にオリジナルの扇子を贈呈するキャンペーンを実施。5000人以上が協力くださった、予定より早く8月末に終了。

★ショップの販売が連日好調
この週は特にお客様が多く、「赤十字活動に少しでも協力できたら」と思い「購入した」という声も多く聞かれ、温かい気持ちでショップにあふれていた。

●「GLOW Red トークイベント」開催
↓43ページ参照

●開幕後22週目で累計来館者が25万人超に
メッセージ投稿数はのべ7.2万件、アンケート回答数はのべ8900件に。

★青年奉仕団や学校・教育関係者の来館が相次ぐ
9月15日 第4ブロック青少年赤十字指導者27人
9月19日 京都府亀岡市立南つづじヶ丘小学校6年生46人
9月19日 文科大臣政務官の金城衆議院議員
9月20日 本社青年奉仕団の万博コアメンバー8人

★来館者アンケート回答数、1万件を突破

★閉幕まで残り2週間。連日、入場制限を行い、多数の来館者で大混雑

●大阪府支部の全面協力で「救急法イベント」を開催 ↓43ページ参照

●万博会場内の催事施設で献血を実施
↓43ページ参照

●累計来館者数30万人目のお客様
「SNSで見た赤十字旗を実際に見てみたいと思ったので」と大阪と滋賀から母娘でお越しになった方が30万人目に。「とても感動した。ボランティアに興味を持った。できることをしたいと思う」とおっしゃっていた。

●最終日の来館者数は最高の2085人に。メッセージ投稿数も最高の8211件
総来館者数は31万人超、特設WEBサイト訪問者も150万人に上り、スタッフは全国からのべ1200人以上が参加した。



ご来館30万人目のお客様



【第24週】閉幕間近で連日大混雑



【第23週】メッセージを投稿する亀岡市立南つづじヶ丘小学校6年生の皆さん



【第20週】パビリオン内に掲示した献血キャンペーンの案内パネル



【第20週】夏休み最後の土日、万博会場は大混雑



【第19週】パビリオンの背後に上がる花火



ご来館20万人目のお客様

全国から駆けつけた職員と ボランティアが完成させた 唯一無二のパビリオン



大阪・関西万博推進室
主査
土橋明子

パビリオン自体が
「人間を支えるのは人間の力」
だと実感できる場所だった

私たちのパビリオンのスタッフは全員、
普段から赤十字の活動に携わるボランテ
ィアと職員だということだが、他パビリオ
ンにはない特徴の一つでした。早番・遅
番の2交代制で、毎日30人以上、のべ
1200人以上の、職種も年齢も、そ
して勤務施設(日赤支部、血液センター、
病院など)も異なる、さまざまなスタッ
フが全国各地から参加し、唯一無二のパ
ビリオンが完成しました。

数日ごとに交代するスタッフによって
半年間、毎日パビリオンの営業を続けら
れたことは、振り返ると奇跡のようにも
感じますが、一人一人のスタッフの懸

命な取り組みの結果です。皆が来館者に
喜ばれるパビリオンにしようと考えて、
清掃やセッティングに汗を流したり、来
館者へのわかりやすい案内に知恵を絞つ
たり、スタッフ同士が協力し合ったりし
て、次に来るスタッフへつなげていまし
た。急病人の発生や急なスタッフの欠員、
落雷警報のある悪天候や夏の過酷な暑さ
などの難しい状況も、地元大阪と近畿地
区の支部、施設などからの力強い協力で
スタッフの知恵と努力と献身で乗り切り
ました。そして、一人一人のスタッフの
バックには送り出した職場やご家庭の支
えがありました。

来館者アンケートでは、スタッフの対
応が親切で感じがよかった、丁寧に質問
に答えてくれたなどの好意的なコメント
が多くあり、皆の取り組みが来館者に届
いていたことがうれしいです。スタッ
フと多くの方々の支えに感謝しています。

赤十字パビリオンのスローガンは「人
間を救うのは、人間だ。The Power of
Humanity」でしたが、パビリオン自体
が人の支えによって運営され、身近なと

ころにある人の力を実感できる場所だっ
たと思います。私も万博での勤務中、ど
れほどスタッフに助けられ、来館者の言
葉に励まされたかわかりません。そして、
自分には何ができるか、できることをし

ようと考えました。このパビリオンでの
体験と出会いが、多くの皆さんにとって
自分にできることを考えて行動するきつ
かけになり、さらにその先に広がってい
くことを期待しています。

来館者のメッセージを 一つ一つ大切に読み、 励まされた日々を忘れない



大阪・関西万博推進室
橋本明乃

思いがこもった言葉を
力に変えて、自分も考え
行動に移したい

来館者の皆さんと一緒に「人間を救う
のは、人間だ。The Power of Humanity」
を考えることができた6カ月間。

パビリオンで来館者と直接お話しでき
たことは何よりも素敵な時間で、たくさ
んのエネルギーをいただきました。真
剣な眼差しで「自分にできることは何か
ありますか」と話してくれた方、「少し

でも力になりたいからグッズを買いた
い！」と立ち寄ってくださった方、「こ
れを機に献血を始めたい」と実際に
行動に移す勇気を持ってくれた方、「娘
のいちばんお気に入りのパビリオンで3
回目です」と何度も赤十字パビリオンに
足を運んでくださった方。

他にも、メッセージウォールに寄せら
れた言葉やSNS投稿など、日々、来館
者からいただくすべてのメッセージを一
つずつ、大切に読みました。一人一人の
思いのこもった言葉にどれほど救われた
ことかわかりません。

皆さんの思いを力に変えて、私自身も、
日々「自分にできること」を考えて、行
動に移すことを続けていきたいです。





上・1日目のパネルディスカッション。
下・9月10日にはGLOW Redの関係者約30人が赤十字パビリオンを訪問。写真は赤十字パビリオンのZONE3でメッセージを投稿している様子。

9月9日・10日 GLOW Red トークイベント

9月9日・10日の2日間にわたり、国際赤十字・赤新月運動における女性リーダーの活躍と育成を目標に掲げる女性組織、「GLOW Red」のトークイベントが「ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier」で開催されました。IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）のケイト・フォーブス会長、GLOW Redのマルガレータ・ワルストロム代表などが登壇。女性リーダーの役割や多様性のある組織づくりの課題などをテーマに、質疑応答を交えながら計6時間にわたって熱のこもったディスカッションが行われ、4回のステージで計300人超の観客が参加しました。



上・「一人でも多くの人がいざというときにいのちを救えるスキルと勇気を持ってほしい」と語る真壁刀義選手とマスター・ワト選手。
下・子どもから大人まで、たくさんの方々で心肺蘇生の体験にチャレンジしてくれました。



9月29日 救急法・AED 体験イベント

9月29日、世界救急法の日にならみ、大阪府支部の全面協力により、赤十字パビリオン前で救急法イベント「ワールド・ファーストエイド・デーin万博」を開催。新日本プロレス所属のプロレスラー、真壁刀義選手とマスター・ワト選手をゲストに招いたトークショーでは、一次救命処置の大切さやAEDについてわかりやすく解説。真壁選手は「AEDを知ることが財産になる」と自らデモも行いながら、救急法を学ぶ意義をアピールしました。この後、選手たちと一緒に、約120人の方々で熱心に心肺蘇生の体験にチャレンジしました。



万博会場「ギャラリーWEST」に特設された献血ルーム。

10月6日・7日 万博DE献血

10月6日・7日の2日間、万博会場内で献血を実施しました。赤十字パビリオンに来館した皆さんから献血をしたいという声が多く寄せられたため、近畿ブロック血液センターと大阪府赤十字血液センターの呼びかけで行うことになったものです。予想を上回る400人以上の方がご協力くださいました。

万博会場で会期中に開かれた 赤十字関連イベント

万博の会期中には会場内で、赤十字の活動を伝えるさまざまなイベントが開催されました。5つの主なイベントをご紹介します。

5月8日 赤十字スペシャルデー

赤十字の創始者アンリー・デュナンの誕生日である5月8日の「世界赤十字デー」に合わせ、「赤十字スペシャルデー」を開催。式典では国際赤十字・赤新月常置委員会委員長のメルセデス・バベ氏が、「赤十字パビリオンは困難なときに人類が団結すればより強くなれることを思い出させる場であり、2025年万博の理念のもと、皆様に人道の力と国際協力について考え、ここで共有される希望の物語に触発されることを願います。ともに力を合わせれば、次世代のためにより公正で思いやりと慈愛に満ちた未来を築けるのです」と語りました。その後、早稲田大阪高等学校「ウィンドバンド」によるマーチングバンド演奏に続き、阪神・淡路大震災の直後に当時小学校教諭だった白井真さん（現・神戸親和大学教育学科教授）が作詞作曲した「しあわせ運べるように」を本人指揮のもとで披露。国内外の被災地で歌い継がれ、赤十字の人道理念にも通じるこの歌とともに、スローガン「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」に込めた思いを多くの人に届ける機会となりました。



上・「ウィンドバンド」のパワフルな演奏。
下右・式典で挨拶する赤十字・赤新月常置委員会委員長のメルセデス・バベ氏。
下左・作詞作曲した白井真さんの指揮による「しあわせ運べるように」の合唱。

5月4日～10日 赤十字ウィーク

5月4日～10日の「赤十字ウィーク」には、さまざまなイベントが開催されました。万博会場内「ギャラリーWEST」で開催された「未来の野外診療所 ゼロ・エミッションの災害医療」では、次世代災害医療用テントや再生可能エネルギーを利用した発電、イノベティブな水循環システム、医療ロボットなどを展示。また、5月5日～9日には、赤十字の人道支援活動パートナーの一つであるムーミンアラビアとの共同イベントも開催。赤十字とムーミンアラビアの限定コラボグッズなどを展示・販売しました。



上・未来の災害医療用テントの内部。
下・ムーミングッズが並んだ会場内。

第4章



日本赤十字社
副社長
鈴木俊彦

万博が示した 「オール赤十字」の力と 創立150周年への一里塚

日本赤十字社は2027年（令和9年）、創立150周年を迎えます。私たちは「人間のいのちと健康、尊厳を守る」という赤十字の理念を実現し続けるために「創立150周年プロジェクト」を、

立ち上げました。

プロジェクトの一環として、「一緒に創ろう日赤の未来」をスローガンにワークショップをスタートしました。全国の支部や病院、血液センター、福祉施設などの職員はもとより、奉仕団、青少年赤十字、有功会などの方々も含め、日赤に関わるすべての人々が参加して、未来の日赤のあるべき姿について議論し、思いを結集したビジョンを策定し、創立150周年を機に社内外に公表する予定です。150周年の事業を単なる一過性のイベントで終わらせることなく、赤十字に関わる全員が一体となり、赤十字の活動を未来につなぐための基盤を築いていきたいと考えています。

2025年大阪・関西万博において、日本赤十字社が企画・制作・運営を務めた赤十字パビリオンは、この150周年プロジェクトの理念を先取りし、体現する「一里塚」となりました。赤十字の理念と活動を世の中に広めるだけでなく、さらに強化していくためのファーストステップの役割を果たしたのです。

パビリオンでは「人間を救うのは、人間だ。The Power of Humanity」を出展スローガンに、来館者の皆様に三つのゾーンを体験していただくことで、日常の尊さに気づき、自分に何ができるかを考え、行動への一歩を踏み出すきっかけの場を提供しました。

職員とご支援者のオール赤十字で
一緒に創ろう日赤の未来

万博から 創立150周年へ



大阪・関西万博の最終日、ZONE3の活動紹介ウォール前にて。赤十字パビリオンの運営に携わった日本赤十字社の関係者が一堂に会した。

特筆すべきは、この体験が来館者の方々ばかりか、運営に携わったスタッフ自身にも大きな影響を与えたことです。職員やボランティアが来館の方々と同じかに対話し、活動について自分の言葉で説明することが、赤十字の使命を深く考えるきっかけになりました。また、所属を超えた職員・ボランティア同士の交流は、赤十字としての一体感を育む結果につながりました。ご来館の方々に、赤十字の国内災害救護活動、国際活動や医療事業、血液事業などの幅広い活動について映像や展示を通して知っていただき、感謝や

励ましの言葉を頂戴したことは、自分たちの仕事に誇りを持つ貴重な機会となりました。

万博を通して改めて感じたのは、赤十字が「運動体」であるということです。会場で何かあれば、すぐにそれを解決すべくスタッフ同士が日頃の所属や立場を超えて話し合い、迅速に対応しました。それは日赤という組織が縦割りや上位下達ではなく、「苦しむ人を救う」という理念のもと、双方向のベクトルでお互いに働きかけ合ってまとまる運動体だからこそ実現できたのだと考えています。

万博では9万件を超えるメッセージウォールへの投稿に加え、来館後にお願したアンケートには約1万5千件の回答が寄せられました。万博から150周年をめざす私たちにとって、皆様からいただいた声は何よりの宝となるものです。

ここでは、150周年に向けて私たちの背中を押してくれる声として、アンケート回答の一部をご紹介します。万博に寄せられた声を「オール赤十字」の精神をより大きく響かせる原動力として、150周年、そしてその先の未来に向け、挑戦を恐れず新しい日赤を創るために、ともに歩んでいきましょう。

赤十字パビリオンに
寄せられた
来館者の声

赤十字への共感

朝、爆撃で目覚め、
砲弾や戦車と隣り合わせの状況で
職務を遂行される

日赤の皆さんのことを思うと、

当たり前の日常が

いかに平和な世界であり、
そこに生きている私たちが

いかに幸せかを

改めて実感します。

(5/25・30代)

10歳の子どもが
「今ある日常を大切に
自分のできることを
考えたい」と感想を
言っていました。

(6/29・40代)

国境に関係なく、人が人を支える姿は胸が
熱くなります。忘れないように、日々大切にしたい
と思います。(7/12・60代)

いつも日赤のお世話になっていて、**将来、人のため
になりたい**という**小学生の娘**は、このパビリ
オンで多くのことを感じたようです。家族でできる
ことを考え、今できることをあきらめずに行き
たいです。皆様の素晴らしい仕事と取り組みに改めて
感謝です。(5/3・40代)

どのパビリオンよりも具体的でリアルな内容だった
ので、自分ごとにつなげて考えさせられました。万
博のテーマでもある「いのち」に**普段から最
前線で向き合っているからこそその臨場感**で必要
以上の脚色がなく、ありありとそのまますを伝えて
いることに好感が持てました。(7/21・30代)

帰ろうかと思っているタイミングで、たまたまキャン
セル待ちの列が目に入り、並んでみました。並ん
で正解でした。**今日入ったパビリオンの中でい
ちばん感動しました**。痛ましい紛争や震災に向
き合い、命の危険を冒してまで人を助ける、支える、
肩を抱く姿に胸を打たれました。募金箱などがあれ
ばお金を入れたかったです。(6/3・30代)

失礼ながら、入るまではまったく期待していません
でした。きっとパネル展示だと。ところが映像で赤
十字の方々の献身的な活動がよくわかり、心にずっ
しりときました。敬意を表します。改めて平和につ
いて考えました。全パビリオン制覇まであと1ヶ
タになるほど多くを見ましたが、**涙が出たのはこ
こが初めて**です。素晴らしい内容をありがとうございました！(9/29・60代)



20年前「愛・地球博」で初め
て赤十字パビリオンを見ました。
映像とミスチルさんの音楽は中
学生だった私には衝撃的で来館
のきっかけになりました。今回
も映像、音楽ともに印象的で、
**この記憶と一緒に生きてい
きたい**と思いました。(7/17・
30代)

素晴らしい映像でした。**日本全
国の小学校で公開してほしい**
と思いました。(7/30・60代)

大それたことではなく、**私も人
間だから人が救えるし、人を
救う役割がある**のだと思えま
した。(6/19・30代)

**赤十字パビリオンを目当てに、埼玉から行
きました！**実際に見て、音を聞いて、思いを馳せ
て、気づいたら涙が出ていました。スタッフさん
が「アンケートは私たちの励みになります」と
おっしゃっていたので「ものすごくよかったです」
と伝えたく、気持ちを綴っております。SNSで「赤
十字は見るべき」という投稿が何件も目に入り、
ずっと気になっていたところ、7日前抽選で当選
でした。これはもう運命だと思い、この日をずっ
と楽しみにしていました。**今年は終戦から80
年ということもあり、戦争について触れる番
組が多く、いろいろ考えることがあったので、
このタイミングで赤十字パビリオンを体験す
ることができてよかったです。一生忘れない
と思います**。こうして文字を綴っている間も、ど
こかの国では、戦っている人たち、傷ついている人たち、
助けを必要としている人たちがいることを忘れません。
私は持病があり、抗うつ薬を服用しているので献血で
きず無念ですが、私の血でよければたくさん寄付した
いと平日頃から思っており、災害の際は募金という形
で支援しております。今回は「いのち」に向き合う機
会をいただき、現場スタッフの皆様も暑中、丁寧な
ご対応をありがとうございました。(8/16・20代)

**いちばん
感動しました。**
これを万博の
パビリオンにふさわしい。
**素晴らしい
演出だよ。**

(4/15・40代)

20年前、**愛知万博の
赤十字パビリオン**で
初めて赤十字を知りました。
20年たって自分が赤十字の一員になり
「やっぱり赤十字っていいな。
**あのときに感じたことが
自分の原点なのだ**」と
モチベーションにつながりました。
(4/23・30代)

**SNSで見かけて
絶対に行きたい**と思っていました。
「無力感や哀しみからあきらめずに
立ち上がる」をはじめ、いろいろな
メッセージを受け取り、感動しました。
**自分で考えて行動する
パワー**をもらいました。
(6/2・40代)

インタビューされた男性と同じく、**阪神・淡路大
震災のとき**家をなくした友人の避難所を訪問しま
したが、あとは**何もできませんでした**。世の中には
あの頃よりも悲しいニュースがあふれていますが、
赤十字の活動に救われている人も多いのだと思いま
す。私は募金や献血から始められたらと思います。
(9/27・50代)

もし小さな**子どもの頃に赤十字のことを知る
機会があったら、今と違う道を歩んでいたと
思う**。この活動を知らない人が誰もいないくらい
になれば、今より平和な世界に一步近づくのではな
いかと期待する。(8/23・40代)



ZONE 2の映像は、**実際に当事者の方が話されているので、心情がダイレクトに伝わってきました。**私自身、教員なので、難民の少女が「ただ勉強したい」と話す場面は特に考えさせられました。小中高生の教材に使えたら、未来を担う子どもたちがそれぞれできることを考えるよい機会になると思います。(10/2・20代)

阪神・淡路大震災を体験した人のコメントは、私の心を表していると感じた。**自分が今、神戸市でボランティアをしている理由**はそこにある。(10/4・50代)

一つ一つの言葉が大変印象に残りました。**人の心を動かすのは、やはり生きた人間の生きた言葉**ですね。(8/9・50代)

ゾーン1に登場したたくさんの方の**写真の子どもたちは無事、大人になれたのだろうか**と、泣けてきました。未来と希望が続きますように。赤十字の皆さんの活動に敬意を表します。(10/8・60代)

とても勉強になり、**将来赤十字で働いてみたい**という気持ちが生えました。(6/9・10代)

東日本大震災のときのことを思い出して胸が苦しくなるとともに、裏でこんな思いをしながらがんばってくださってる方々がいることに、涙がこぼれました。ありがとうございます。(9/30・30代)

SNSで「**泣いている人がいちばん多いパビリオン**」という記事を読んで、すごく気になって最終日の最後の組で入館。内容は衝撃的だが、**自分の生き方を見つめ直す**チャンスを与えてくれた。これから自分にできることを探して、何かの助けになれるように生きてゆきたい。(10/13・40代)

私は海外旅行が好きな、**医療従事者の卵**です。万博へは、国内で海外旅行気分を味わいたくて来ていたなか、知人に赤十字がすごくよかったとオススメされたので「予約抽選に当たれば行こう」くらいに思っていました。しかし**パビリオンを体験した今では、初めから必ず行かなければならなかったなと思っています。**医療従事者をめざすうえでの使命や責任を痛感するとともに、医療従事者のかっこよさを改めて感じ、**自分の将来の夢に改めて向き合う**ことができ本当に有意義な時間でした。私は将来、腕のいい診療放射線技師になりたいと思っています。医師や看護師と比べるとできることは限られているかもしれませんが、国内外問わず多くの人の救命措置や健康促進に携わり、健康で平和な世界のために貢献したいです。今日、職種は違えど、実際にこのように世界規模で活躍する医療従事者の方のお話を映像で聞き、職員の方と話すことで私の夢をリアルにイメージすることができました。必ずこの夢を叶え、世界の健康に貢献したいと思います。今日が私にとって万博最終日で、赤十字パビリオンが最後に訪れたパビリオンでした。最後の最後に行けて本当によかったです。私の胸を熱くさせ、当たり前に来ると思っている未来に希望を持たせてくださり、本当にありがとうございました。スタッフの皆さんが優しく、とても心温まりました。医療従事者の需要が減るほどに、健康で平和な世界になりますように。(9/30・20代)

「人間を救うのは、人間だ。」というメッセージに感動し、映像にも心を大きく揺さぶられました。万博に行くという**友人には必ず赤十字パビリオンをオススメしています。**(9/18・20代)

今日は結婚記念日。**主人とは赤十字のボランティアで出会いました!**すべての人に幸せを。(6/24・50代)

赤十字という名前は知っていて、ニュースなどで目にすることはあっても、具体的にどのような思いでどんな活動をしているのかなど、よくわかっていませんでした。**活動の一端に触れ、もっと知りたいと思うよう**になりました。(6/19・40代)

震災を思い出して**辛かった。**でも、あとき救ってくださった方々を**忘れない。**(5/23・60代)

小学生だけど、いい経験になった。(9/3・10代未満)



石巻でなびいていた赤十字旗。「**誰一人取り残さない、あきらめずに目の前の人を救う。**」使命を持った方々の尽力に感謝いたします。(5/3・50代)

赤十字といえば医療を提供するイメージでしたが、**それだけではなく、尊厳の回復**をめざすという部分に感動しました。(10/10・40代)

一緒に来た全員が涙を流し、やっぱり赤十字っていいなって思えました。
将来助産師として国際的に活動していきたいと考えているので、いろんなことを再度考えるきっかけになりました。(9/24・20代)

自分には障がいがあり、生きることに悩んでいるのですが、パビリオンで見た映像のおかげで自分もまだあきらめてはいけな
と勇気づけられました。(9/24・30代)

爆撃を受けて今日も震えながら懸命に生きている人たちがいること。自分の身も危険な環境で、誰かの命を救うことを目的にがんばる赤十字スタッフの皆様の思いが、映像を通じて伝わりました。**能登半島地震が1月1日**に起こったとき、神様なんていないと思いました。「人を救うのは人でしかない」。できることをして、それが**少しでも誰かの支えになるように私もがんばります。**今日は素晴らしい経験ができたことに感謝します。(9/3・40代)

子どもが今の世界情勢に心を痛めていました。万博ではこんなに楽しい時間を過ごせるのに……と。親子で学び、**行動に移していきたいと話し合うきっかけとなったパビリオン**でした。(6/29・40代)

心揺さぶられる素敵なパビリオンで、赤十字の提唱する人道的価値観についての理解が深まりました。**赤十字ボランティア**の存在も初めて知り、**実際に始める予定**です。(8/2・20代)

僕は**14歳の男子中学生**です。僕の親友は赤十字に入って紛争地域や助けを必要とする子どもたちを助けたいと言っています。そいつは小学生の頃から救命外傷のことを学んで人を助けたいと言っている自慢の親友です。僕はそいつに言われてパビリオンに来るまで赤十字なんて興味なかったし、紛争なんていろんなところで起こっているからと言って知ろうとしませんでした。でも赤十字パビリオンに行ってみて、世界で助けを求めている人、教育を受けられていない子ども、どんなに苦しくてもあきらめず手を差し伸べている赤十字の皆さんのことを知り、**僕の将来の夢は**ただ「教師になりたい」から**「教育を必要とする人、学びたいと思う子どもや一人でも多くの人に質のよい教育を行い、【夢】を見られるようにしたい」**に変わりました。今この瞬間も世界で人のいのちと健康、そして尊厳を守るため、救うために闘っている赤十字の人に心から感謝し、心の底から応援しています。僕は外国の紛争地域に教育を届けられるようにがんばります。闘ってくれているすべての医療従事者、そして赤十字の人たちにとって、少しでも心の励みになることを願っています。**世界の人た**ちを救うのが赤十字なら、**赤十字の人たちを助けるのは僕たち**だと思います。がんばってください。(10/4・10代)

東京から万博に来て、一番に参加しました。**自分が医療従事者をめざした原点に帰ることができました。**先日、日赤の救命講習、幼児安全法講習に参加したとき、技術がままならない受講者を見捨てることなく丁寧に指導してくださり、感謝しています。いつか再び日赤大学院で学び直したいという気持ちを新たにしました。そのために勉強をがんばります。そして娘も看護師・日赤をめざしています。(6/1・40代)

献血100回以上の夫を見て、いつも「趣味なの？」と笑っていましたが、あれも大切な貢献なのだと思ひ、寄付をもっとしようと思ひました。赤十字の皆さん、本当にありがとうございました。いつか、赤十字を必要としない世界になりますように。(7/17・60代)

今も世界のどこかで起こっている悲劇をみんな見て見ぬふりをしているのが現状です。誰かがじゃなくて、**自分が何か一つでも行動に移して、**世界が少しずつでも変わってほしいです。(5/31・10代)

新聞で**ガザ地区で赤十字活動を行っていた日本人女性の記事**を見て、大阪万博で絶対入場したいパビリオンでした。医療の発展の陰には必ず戦争があります。使い捨ての注射器や注射針、ダビンチに代表されるロボット手術などは、悲しいことに戦場で効率よく医療行為をするために開発されました。これはこれからも続いていくことでしょう。戦争の後には平和が来ないのに、**矛盾だらけの世界ですが、それでも人は人のために助け合い、立ち上がることを学びました。**私も医療従事者の一人として、これからも微力ながら日本の医療に関わっていきたく思っております。(9/30・60代)

看護師をしています。阪神・淡路大震災のときは、職場から見た長田の街が燃える光景を今でも鮮明に覚えており、忘れることはありません。**「いつも相手の心に寄り添い、生きている今を、命を、大切にしたい」**と改めて強く感じました。素敵な活動をありがとうございます。(7/17・50代)

震災から1週間たたない頃、職場からの派遣で映像に出てきた石巻の湊小学校に行きました。当時を思い出しながら見ていたのですが、あのときあの場所にいらした方が、今は看護職に就き、現場に立たれている姿に涙してしまいました。**それぞれの現場で今できることに力を尽くしていきたいと思ひます。**(7/2・50代)



映像を見て当時の後悔を思い出しました。東日本大震災のとき、私は赤十字病院勤務でしたが救護員の資格を更新しておらず、後方支援しかできなかったことを何度も悔やみました。**後日講習を受け直して救護班に入りました。**皆さんの活動が日本を、世界を支えています。献血70回超えました！「めざせ100回!!」で応援続けます。(5/31・40代)

大学生です。赤十字のパビリオンで活動内容を深く学べてよかったです。「利他主義は究極の利己主義」という言葉を聞いたことがあります。私は体の問題で献血ができなさそうなので、寄付とか何かできることをしたいと思ひます。**次の給料日が来たら寄付します!!**(10/2・20代)

傍観者から協力者になろうという勇氣を持てました。この気持ちを忘れずに持って帰りたいです。(9/29・20代)

小学3年生の娘と一緒に体験しました。体験後、娘は「うまく言葉にまとめられないけど、心にグツときた」と言っていました。紛争地域で自らの命が危険に晒されながらも治療を続けている、震災で辛い思いをしても看護の仕事が続いているスタッフの方々に尊敬します。私自身も何かできることを見つけていきたいと思ひました。(4/27・50代)

現在19歳で、将来国際協力をすることを目標にしています。**赤十字の活動は献血しか知りませんでした**が、今回のパビリオンで、**将来の夢に直結した国際活動**を行っていることを知り、興味が増しました。大学受験に向けて勉強中なので目標がより明確化され、がんばろうと思ひました。(10/1・10代)

昭和60年の日航機事故のとき、私は警察職員でした。現場から戻った何人もの警察官から、**普段は命を救う立場の日赤の看護師さんたちがご遺体を丁寧に扱う姿に頭が下がった**という話を聞きました。その精神が今も引き継がれ、事故や災害時の皆様の活動につながっていることに敬意を表します。私自身は大したことはできませんが、献血の回数がやっと50回を超えました。今後もできる限り続けていけたらと思ひます。事故や災害が起こらないこと、そして皆様のご健康をお祈りいたします。(9/29・60代)



幼い頃、私は新潟県で**中越地震**を経験しました。たくさんの方に助けをもらい、たくさんの方に支えられながら大人になることができました。この感謝を忘れずに生きたいと、このパビリオンを通して改めて思いました。**みんなが安心して平和に暮らせる世の中になってほしい。**そして自分にできることをして少しでも協力していきたい。本当にありがとうございました。(8/24・20代)

私たち家族は七尾市に住んでいて、**能登半島地震**で被災しました。皆さんの車が何台も被災地に来てくれたことを思い出します。あのときはありがとうございました。おかげで勇気づけられました。**娘は日赤病院の看護師**をしていて、能登半島地震でもボランティアに行きました。今回パビリオンを見て、**娘が誇らしく頼もしく**思いました。皆さん、いい仕事をされていると思います。体に気をつけて活動してください。応援しています。(7/21・50代)

新潟豪雨の洪水被害に遭った友だちの家へ片づけの手伝いに行ったとき、**日本赤十字社から提供された避難用のキット**を見せられました。こんな物資まで準備して、有事の際は提供してくれているのだと感銘を受け、以来、災害時の募金先はまず赤十字です。活動を応援しています。(8/15・50代)

赤十字パビリオンに寄せられた来館者の声

震災時の赤十字への感謝



2度目の赤十字パビリオンの訪問です。昨年の6月頃、心斎橋に献血に行ったとき、テーブルにあった広報誌『日赤大阪』が目にとまりました。見ると**能登半島地震**の記事が出ていて、**避難所で血圧測定中の父の写真**が大きく載っているではありませんか。帰省中の元日に突然起こった地震を思い出し、涙してしまいました。母も別の号に載っていたので、2人の写真を金沢のみなし仮設に住む両親に送りました。父は「**日赤の皆さんは親切丁寧だった。ありがたかった**」と何度も語っていました。病気を患い、感染症などの怖れで神経質になっていた父にとって、皆様の存在はとても心強かったと思います。私が献血を始めたきっかけは父のMDS(血液の難病の一つ)発症でした。父は能登半島地震の発生時には自宅療養中で数値も安定していましたが、1年前、急性骨髄性白血病に移行して、残念ながら万博の開会式があった日にこの世を去りました。母が当時のお礼が言いたくて日赤の大阪支部にお電話したところ、偶然父と一緒に写っていたスタッフの方が出られたそうで、**母が興奮して「うれしかった」と連絡してきました。**父、母に代わり感謝を申し上げます。心から行ってよかったと思っています。どうか皆様、ご自愛のうえ、最後まで駆け抜けてください。(9/8・40代)

阪神・淡路大震災で10日間の避難生活を経験しました。**赤十字さんからいただいた歯磨き用のプラスチックのコップ**が今でも洗面所で活躍しています。募金を見かけたら協力します。(10/1・60代)

万博最後のパビリオンで赤十字を選んでよかったです。僕はまだ**14歳**ですが、今後の原動力となる体験ができました。**親友もめっちゃよかった！と言っていました。**看護師になり、いつか皆さんと活動をともにできることを夢見ています。これまでにない感動をありがとうございました！(10/14・10代)

献血回数だけは300回を超えましたが、今回のパビリオンの情報に触れて、何が不足していることに気づかされました。それは**困っている人と直接向き合う姿勢**かな？(7/4・50代)

現在**37歳**ですが、パビリオンを見て感銘を受け、**今から看護師になることを決めました。**人生の大きなきっかけをくださり、本当にありがとうございます。(10/13・30代)

小学校の教員をしています。入館前は医療がテーマだと思っていましたが、心のつながりなど、生きていくうえで欠かせないものを学びました。夏休み明け、クラスの**子どもたちに伝えていきたい**と思います。(8/9・20代)

連日戦争に関するニュースばかりで、こうした支援活動について、リアルタイムに知る機会がなかったように思う。せめて備えとしてできること、**簡単な応急処置法などを学び直しておこう**と思った。(5/5・20代)

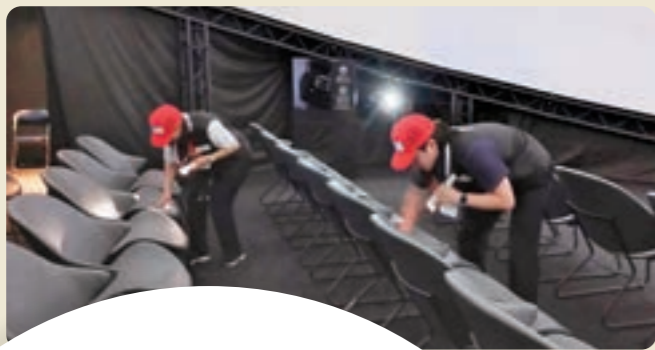
訪問してから**丸1日たった今も「人間を救うのは、人間だ。」というフレーズ**が強く印象に残っています。そのときにしかできないことにいつでも携われる人間になれるように意識して生活していきます。ありがとうございました。(5/19・50代)

なんとなくしか知らなかった赤十字の活動を知れてよかったです。私は徳島在住で、将来絶対、南海トラフ地震を迎え撃たねばなりません。防災の準備は家族分しかしていませんが、**防災準備、見直します。**いざというときに一つでも**近くにいる誰かを笑顔にする行動**を取りたいと思いました。帰ったら



私は反抗期で家族に冷たくしたり、友人関係で悩んで友だちに冷たくしてしまうことがありました。でも**当たり前の日常は当たり前ではないことがわかり、これからは家族や人のことを思って行動し、必ず医者になって人のためになる**ので、皆さんもがんばってください！(9/20・10代)

まさか号泣するとは……。人命を救うために日々のご活動ありがとうございます。私もできることから始めようと思いました。**まずは献血から！**(4/5・50代)



シアターの座席を1席ずつきれいに拭いてからお客様を入れ替える姿を見て、すべてのパビリオンの中で最もホスピタリティを感じた。案内も流れ作業ではなく話し方も丁寧で、襟を正す気持ちになった。
(9/15・50代)

がんばってね！
かっこいい。
憧れだよ！
(9/23・10代未満)

展示内容がすごく心に沁み入って**自分が変わるために踏み出す一歩**になったような気がした。特に子どもたちに見てほしい内容だった。**小6のわが子は「ちょっと泣きそうになったわ」と**感情をうまく言葉にできないような表情でつぶやいていました。(5/25・40代)

脳出血で倒れ、車椅子生活となった**母の車椅子を押し、一緒に万博体験**に赴きました。SNSなどでこちらのパビリオンの感想を目にすることがあり、どうしても足を運びたかったのですが、事前予約はまったく取れず、「予約なしでも並べますか？」と入口の男性スタッフに質問したところ、規制中ですが……と、とても丁寧にこちらの気持ちに寄り添ったお返事をいただき、迷うことなく規制解除まで並んで待つことができました。スタッフの方々は自然に優しく丁寧に対応してくださり、常にお声がけいただき、安心できました。ほんの数回しか万博に足を運ばせんでしたが、数々のパビリオンの中で**いちばん心ある対応**だったと思っております。万博最後のパビリオン体験がこちらで本当によかったです。どうもありがとうございました。私自身も人と向き合う仕事をしており、**改めてホスピタリティとは何かを思い返す**ことができました。想像以上にたくさんの方々が来館し、酷暑の中でスタッフの方々もとても大変だったかと思えます。本当にお疲れ様でした。皆様が会期終了まで健やかに走り切ることができますように。貴重な体験の時間をいただき、ひとときの出会いでしたが、そのときにくださったスタッフの皆様とのご縁に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(10/10・10代)

夜盲と視野障がいで杖をついていますが、**男性スタッフ**がさりげなく**音声ガイドの端末を渡してくれました**。音声アシストのおかげで映像内容をタイピングよく理解することができて助かりました。ありがとうございます。
(6/1・40代)

メッセージを記入したときにスタッフの方が「お写真撮りましょうか？」と声をかけてくださり、スクリーンをバックに写真を撮っていただきました。**1人参加で自分が写っている写真は何もなかった**ので、この**1枚が**とてもよい記念になりました。メッセージボードに献血のことを書いたら、スタッフの方が「献血されるんですね」と声をかけてくださり、関西で展開中の献血キャンペーンを教えてくださいました。おかげで旅行最終日に大阪駅近くで献血ができて、記念品の扇子をいただきました。**献血以外にも誰かのためになる行動をした**なと思えました。
(7/16・40代)

スタッフさんから、酸いも甘いも噛み分けた歴戦の風格を感じた。
(10/11・20代)

最後に車椅子のスタッフさんが出てこられました。**身体が不自由でも活動できるんだと、**すごく勇気づけられました。ありがとうございます。(6/11・50代)

小学生の子どもたちと映像を拝見しました。**発達障がい**で普段はあまり感情が出ず、なかなか思ったことを書けない子が**自らボードに「かんだうした」と**書いていました。もう一人は「**10リットルの涙が出た**」と表現していました。(8/17・40代)

「見せてあげる」という雰囲気のパビリオンが多なかで、こちらは**来館者に「感謝」という印象**を受けました。真摯な対応が素敵でした。(10/8・60代)

パビリオンの映像を見て、**日赤スタッフの方も災害で失くしたものがあつたり、**無力感から辛い思いをしているという当たり前のことに気づきました。**寄付や献血で少しでも力を合わせたい**と思いました。(6/29・30代)

赤十字パビリオンに寄せられた来館者の声

スタッフへのエール・感謝

娘が書いたメッセージを見て、娘の気持ちを知ることができてよかったです。メッセージの写真を撮っていると「**お二人でお撮りしましょうか**」と声をかけられたその一言が、とてもうれしかったです。いつもは撮る側の私、娘と一緒に写真は大事な思い出です。(5/25・40代)



万博でパビリオンの運営に参加した 赤十字ボランティアの皆さん

赤十字パビリオンでは全国から集まった赤十字ボランティアが運営に参加しました。
ここでは一部の皆さんの声やその活躍ぶりをご紹介します。

存在を再認識の 全国の仲間

私は高知県の中央西地区いの町分区の日赤奉仕団に所属しています。今回、万博のボランティア募集の話聞き、掃除や運搬程度であれば自分でもお手伝いできるかなと思い、参加しました。普段は店舗を営んでいるのでお店を休む必要がありましたが、家族が後押ししてくれました。

いざ万博のパビリオンに行ってみると、来館者の誘導や説明など、周囲と協力してしっかり運営を支える役割が求められたため、配布されたマニュアルを読み込んで、できる限り動けるよう努めました。会場は暗く、まさに暗中模索状態(笑)でしたが、積極的に声をかけ合いながらサポートしました。他のボランティアも日赤に携わる人たちで、同じ志を持った仲間が全国にいるんだということを再認識し、連綿と受け継がれる日赤のDNAのようなものを感じられたことがうれしかったです。

パビリオンには年齢や国籍を問わず、いろいろな方が来館されていました。特に

ZONE3のメッセージウォールでは、記念撮影を促すために、外国の方に簡単な英語で声をかけたり、子どもたちに「私が撮るよ」と声をかけたりと、積極的にコミュニケーションを取るようになっていました。

このパビリオンを通じて、未来を担う若い人たちが、平穏な日常がかけがえのないものであることを知り、それぞれの思いを育ててほしいと思いました。

—— 森木知津子さん(高知県支部)



メッセージウォールの前でお客様に声をかける森木さん。

赤十字の人道の心に触れるきっかけに



ZONE3で来館者に赤十字の人道の心とは何かを説明する安井さん。その姿に来館者からはたびたび拍手が起きました。

生まれつきの障がいがあり、車椅子生活を送りがら10年間、赤十字ボランティアを続けてきた安井優さん。赤十字パビリオンではZONE3の案内役を務めました。赤十字の人道の心を力強く語る安井さんの言葉に引き込まれる来館者は多く、「車椅子で活動しているスタッフさんの姿を見て、自分にもできることがあると勇気づけられた」といった声も聞かれました。安井さんは「私自身、最初は困っている人を見かけてもなかなか声がかけられませんでした。皆さんにも勇気を出して『大丈夫ですか』と声をかけられる人になってほしい。このパビリオンが赤十字の人道の心に触れるきっかけになればと強く思います」と語ってくれました。

—— 安井 優さん(大阪府支部)

大切な人に 思いを馳せる機会に

支部では水上安全法の指導員ボランティアをしています。普段はプログラマーの仕事をしていますが、赤十字パビリオン運営のために有休を取得しました。ドームシアターから出てきた看護学校の先生が「ここに学生を連れてきたい」と熱い思いを話されるのを聞いたり、メッセージウォールに「赤十字の素晴らしい活動に感謝」という文字が浮かぶのを目にしたり、ボランティアをしながら、私も大切な人たちの思い、初日から何度も感動していました。

—— 阪口真治さん(滋賀県支部)



赤十字パビリオンへの 来館を機に 赤十字奉仕団に参加した人も

多くのボランティアが活躍した赤十字パビリオンですが、その一方で来館を機に、新たに赤十字ボランティアとして活動を始めた人もいます。かつて赤十字ボランティアだったという看護師の寺本幸子さん(大阪府支部)は来館後すぐ大阪府支部に電話し、看護奉仕団に登録。また、広告制作会社に勤務する麻生真奈さんもパビリオンで日本赤十字社の活動の幅広さを知り、大阪府支部の青年赤十字奉仕団に登録。二人とも「自分のできることをしていきたい」と語ります。



寺本さんと麻生さんの記事が掲載された2025年12月18日付の読売新聞大阪版朝刊。



万博会場でも活躍した青奉万博チームのリーダーたち。

SNSによる情報発信で 活躍した青年赤十字奉仕団

「青奉(青年赤十字奉仕団)」とは、18歳から概ね30歳までのユース世代で組織された日本赤十字社のボランティア団体。「青奉万博チーム」は、大阪・関西万博を活用して赤十字ボランティア活動の活性化を図ることを目的に発足したものです。主な活動はSNSによる活動情報などの発信で、7つの部会が活動し、合計150以上の記事を投稿しました。

映像に涙する お客様の姿に感動



普段は、府支部で赤十字救急法等講習の指導員ボランティアをしています。運営ボランティアは9時の開館に備えて8時半までにスタンバイすればよいのですが、初日の混雑を予想して約1時間前に万博の入場ゲートに着いたところ、想像以上の人出でなかなか入場できず、少し焦りました。強い雨も降ったので、濡れたカッパのままドームシアターの席に座る方もいて、次の方のために短い入れ替え時間ですべての席を布で拭くなど大忙しでしたが、上映中に観客が映像を見て涙をぬぐう姿を見て、人を救う赤十字の活動を知ってもらえて本当によかった、と私も胸が熱くなりました。

—— 足立則子さん(大阪府支部)



赤十字バビリオンに寄せられたスタッフの声

印象に残ったこと

初日にゾーン2を担当しました。最終回の終了時にアナウンスをしたところ、

席にいらした

お客様が全員で拍手を

してくださり、

すごくうれしかったです。

感極まってこちらまで

涙声になってしまいました。

(血液センター)

赤十字ファンの子どもにめっちゃくちや話しかけられました。将来有望と思いました(笑)。

(本社)



献血の使い道についての質問にお答えすると「よく献血に行っていて、いつもどこで使われているんだろうと思っていたが、必要なところに調整して届けてくれていることがわかってうれしかった。全血がそのまま使われていないことにもびっくりしました。私が続けていることは誰かの役に立っているのですね。これからも続けます」と言ってくれました。(社会福祉施設)

電動の車椅子に乗った男性が「週2回アルブミン製剤を投与して生きています。本当に赤十字に感謝しています。お礼を伝えたくて」と声をかけてくれました。輸血などを受けられた方から直接お話を聞くことは初めてで、血液事業にいる私は献血者の皆様と輸血を受ける方の架け橋となる仕事なのだと感じた貴重な体験でした。(血液センター)

5~6歳くらいの男の子が出口付近に書いてある「人間を救うのは、人間だ。」というスローガンを見て、「そんなの当たり前じゃん〜!」と話しかけてくれました。当たり前だと言える男の子のまっすぐさにとても感動しました。(血液センター)

「献血以外に何かできることがあるか」と質問された際、自分が地元の大阪で青年赤十字奉仕団で活動していた話をしました。入職からまだ2年だが、これまでの人生すべてが今に生きているのだと感じました。(病院)

ZONE3を志願し、「石巻赤十字病院の赤十字旗」の説明をさせていただいた。何度でも見たいと再訪された女性、当時北海道からボランティアに駆けつけたという高齢男性、素晴らしい展示館だったとほめてくださったご夫婦など、震災の映像と説明から新たなコミュニケーションが生まれ、それぞれの思いを紡いでいく……。そんな空間にいられて幸せでした。「やっぱり大変だったあの日を人は忘れていく。ときどきこのような映像や当時の様子を思い出させる場所が必要」なんだなあ。本当に来てよかった」という北海道から来た男性の言葉が印象に残りました。(ボランティア)

2日目から名札に「from くまもと」と書きました。私も救護班などで活動したのですが、熊本地震や人吉球磨豪雨のことを気にかけて声をかけてくださったお客様が「大変でしたね。がんばりましたね」と労ってくれました。ZONE2の映像にあったように「相手の気持ちを考えて言葉をかけられるのは人間しかない」ということを実感しました。(病院)

ZONE1を担当しました。普段の業務とは異なる内容で緊張しましたが、周囲のスタッフの方々と協力しながら来館者をお迎えすることができ、貴重な体験になりました。日頃なかなか接点のない全国の職員の方と交流する機会を得られたことも得がたい経験でした。全国に数万人規模で存在する赤十字職員やボランティアの皆様のおかげによって運営されていること自体がこのバビリオンの魅力で、一職員ながら「赤十字っていいな」と思うことができました。(本社)

お客様の一人から「輸血をして白血病だった息子が助かりました。ありがとうございました」と涙ながらに伝えていただいたときは、血液センターで働く者としてこの仕事をしていたよかったですと強く感じました。(血液センター)

毎回休憩時間に控え室で、来館者アンケートを読むのが楽しみでした。何度か泣きそうになりました。他のバビリオンを回ったり予約したりしてお疲れがあるなかで、エピソードを交えて真剣にコメントを書いてくださった方が、こんなにもたくさんいたことは、赤十字バビリオンのメッセージが伝わった証拠だと思います。(ボランティア)

ZONE3で「看護師になって人々を救いたい」というメッセージを書く男子大学生がいました。話を聞くとキラキラした目で看護師になる夢を語ってくれました。映像を見てさらに思いが強くなったのかもしれないと、うれしく思うとともに、将来を担う若者に希望を持つことができました。(病院)

「何も考えず、ぼーっと生きてきた人間なんですけど、献血に行って何か自分にもできることをしようと思いました」という男性の声を聞き、このバビリオンを通して「人を助けよう」という思いを新たにされた方がいたことに心を動かされました。(ボランティア)

中学生くらいの男の子がZONE3で何度もメッセージを書いては消し、書いては消して、投稿した直後、逃げるように去っていきました。見ると「赤十字の皆さん、がんばってください」と書いてあって感激しました。(支部)

「赤十字に触れてほしい、知ってほしい」の一心でZONE3の運営を行った。うなずきながら話を聞く方のことや**説明後にいただいた拍手**は一生忘れることはありません。話題は阪神・淡路大震災に関するものが多く、当時私も大阪在住だったので、「そのとき生まれた子どもはもう30歳。今日を迎えられたのは周りの助けがあったからで、**今度は自分たちがその恩を返したい**」と涙ながらに語る方の篤い言葉に心から共感した。(ボランティア)

車椅子の方が目に涙を浮かべながら「何回も来ている。**あきらめてはいけないという言葉にいつも励まされている**。自分は献血しかできないが、できることをやりたい」と言われた。赤十字パビリオンが勇気を与えていると感じた。(血液センター)

1回目の来館で「ぜひ赤十字で働きたい」と語った**10歳の息子さん**。お母様は「まだ戦争や災害を直視できないのですが……」と言いながら再度来館してくれました。**次の世代とつながっている**ことがうれしかった。**過去・現在・未来の赤十字**を再確認し温かい気持ちになった。(本社)

皆様からいただいた**メッセージを見て、自分が日赤をめざしたきっかけを改めて思い出しました**。活動の先にいる助けを求めている人たちのことを常に考え、初心を忘れずにがんばっていきたいと思います。(支部)

外国の男性2名がゾーン2鑑賞後、泣きながらゾーン3に出てこられ、**メッセージウォールに大きく「LOVE」と書き、抱きしめ合っているのを見てグッときました**。(病院)

お子さんが投稿された「**ぼくは、つかうのは、ずるいで**」というメッセージに胸が打たれました。(支部)



目の不自由な来館者様とその同行者様へ**UDガイド**(音声で展示内容を説明する端末)をご案内した際、「**こういうのがあるのね！よかった！**」とお言葉をいただきました。不安なく楽しめるようにという配慮が伝わったと感じました。(血液センター)

印象に残ったことをいくつか記します。

- ①看護師、そして日赤で働くことを夢見る高校生が話しかけてくださったのですが、夢あふれる姿がとてもまぶしく、**私もがんばろうという気持ちになりました**。
- ②メッセージに「**あのとき助けていただき、ありがとうございました。忘れません**」と残している方がいました。詳細を尋ねることはできませんでしたが、**日赤の誰かの行動がその人の助けとなり、今につながっている**ことを実感できました。
- ③子連れのお母様がZONE3で「**子どもがもう1回見たいと言っているので並んでいいですか?**」と、**1日に2回連続で入館**してくださいました。5~6歳ぐらいのお子さんでしたが、何か心に響くものがあったのかな……。
- ④「日赤っていつからあるんですか」と声をかけられ、パンフレット立てに子ども向けの日赤の本があったので、子ども向けで申し訳ありませんがと、それを活用して日赤の歴史をざっくり説明したところ、その後、真剣に時間をかけてその本のページをめくっておられ、うれしく思いました。
- ⑤万博期間中に実施した献血キャンペーンに興味を示してくださる方も多く、うれしくなりました。「いつも行っているよ」「私はまだ行けるかな?」といった積極的な皆さんの姿、そして「いっぱい献血して助けてもらったから私も役に立ちたいんだけど、献血できるかな」と言ってくださった方。**たくさんの「誰かの役に立ちたい」という気持ちを受け取ることができました**。(病院)

阪神・淡路大震災の映像のときだけ目をぎゅっと閉じて耳を塞いでいる人がいた。震災後生まれの私は「**この方の中ではずっと震災は続いている**」とその辛さに初めて思い至った。映像の「相手のことを想って声をかけられるのは人間しかない」という言葉を思い出して「大丈夫ですか」と声をかけた。安心した笑顔を見て、**赤十字の理念を行動に移せた**と思えた。(病院)

20歳前後の**若い男性**から「**感動しました。赤十字の活動に参加するにはどうしたらいいですか?**」と聞かれたことが印象に残っています。(病院)

ZONE3に親子4人で来館され、お母さんが「第二子出産のときに輸血を8リットルしてもらいました。**輸血のおかげで家族4人揃って万博に来ることができました**」とメッセージを残されて感動した。(支部)



あいにくの大雨で、どのパビリオンも傘を差して外で待たれる方が多いなかで「**赤十字にはいつもテントがあるよね**」と会話を交わすお客様。テントも赤十字のイメージになっているんだと心に残りました。(血液センター)

私がZONE1にて業務をしていた際、キャンセル待ちに並ばれていた高齢の男性の方が、暑いなかで並んでいたため、少し不機嫌そうでした。順番が来て館内にご案内したところ、一巡後わざわざZONE1にいた私のところまで戻ってきて「**スタンプを押しただけだったけれど、感動したよ**」と強く握手をして帰られました。炎天下に並んだ疲れを忘れるほど感動された様子に、こちらもうれしく思いました。(血液センター)

小学4、5年生の女の子が「戦争のおそろしさがよくわかった」と書いてくれました。戦争はダメと学校で教わったはずですが、こうやって映像で見て話を聞くことでしつかりと心に刻んでくれたんだなあと感じました。理解が広がる**ことが**平和への第一歩だと思えます。(病院)

小さなお子さんが**覚えたての字で一生懸命メッセージを**投稿しているのを見たとき、感動で泣きそうになりました。(血液センター)

ZONE2を経て、**思いがあふれて号泣**されている方がおられて、落ち着くまで、そばでお話しさせてもらった。「発災直後のいちばん大変な時期は個人ボランティアの募集はされていないし、やっとボランティアに参加できても、その頃にはできることは残っておらず、話を聞くくらいしかできない、**私は何もできていない**」とおっしゃっていた。「被災地で聞いた話を家族などにも話すことができないんだ」ともおっしゃっていた。そういういろいろな思いを封印して、このパビリオンに来たけれど、動画を見たら思いがあふれてきてしまったとのこと。そこで僭越ではあるが、その方が苦しんでいる人に心を寄せ、自分にできることをすでに実行されていることや、**こころのケアについては赤十字救護員も勉強する大切な内容**であり、素晴らしい活動をされているということをお伝えしたところ、最後には落ち着き、晴れやかな表情になってパビリオンを出ていかれた。**職員として、人として、その姿勢を学ばなければと思った**。(支部)



国内災害救護

赤十字病院の医師、看護師、事務職員などで構成される救護班を編成し、災害時には関係機関と連携し、医療救護などを行います。また、日頃から研修や訓練を重ね、災害に備えています。



国際活動

海外で大規模な災害などの人道危機が発生した際、資金援助のほか、訓練を受けた医療スタッフや技術・管理要員と医療資機材をセットにした「緊急対応ユニット」などを派遣し、現地で医療活動を行います。



赤十字病院

良質な医療の提供のため、すべての病院に医療安全推進室を設置。感染管理担当者も配置し、医療事故や院内感染の防止への取り組みを強化し、医療の質の評価・公表等推進事業に積極的に取り組んでいます。

人を救うために赤十字が取り組む 9つの事業

傷つき、苦しむ人に敵も味方もない。戦場に芽生えた赤十字の考えは、今では人間のさまざまな痛み・苦しみ・悲しみに手を差し伸べる活動へと広がりました。日本赤十字社は、常に社会のあらゆるシーンに目を向け、救いを必要とする人々のために人道的支援を展開しています。「人間のいのちと健康、尊厳を守る」赤十字の理念をカタチにした9つの事業をご紹介します。



看護師等の教育

看護大学、短期大学、専門学校、助産師学校、幹部看護師研修センターで看護師、助産師、保健師、介護福祉士を育成しています。卒業生は確実な知識と技術、赤十字の精神を身につけ、力を発揮しています。



血液事業

輸血などに使われる血液製剤は、健康な方々から自発的に無償で血液をご提供いただく「献血」によりつくられています。近年は、若年層献血者が減少傾向にあるため、積極的な献血推進活動を実施しています。



救急法等の講習

救急法講習では、一次救命処置としての心肺蘇生やAED（自動体外式除細動器）の使い方、応急手当などの知識と技術を習得できます。救急法を身につけていれば、いざというときにいのちを守ることができます。



青少年赤十字

学校教育と協働してきた強みを生かし開発した、独自の教材を国内すべての小・中・高等学校に無償で配付し、質の高い防災教育を推進しています。他者への思いやりや優しさ、いのちの大切さを学ぶ力を育成します。



社会福祉

全国で児童福祉施設、高齢者福祉施設、障害者福祉施設など28の福祉施設を運営。個人の尊厳を持って自立した生活を送ることができ、誰もが安心して元気に生活できる社会の実現をめざした施設運営を行っています。



赤十字ボランティア

市区町村ごとに結成された地域赤十字奉仕団は、地域のニーズに合わせた活動が特徴。高齢者支援活動や児童の健全育成活動、防災活動、災害時の炊き出し、募金活動、赤十字活動のPRなどを行っています。



人間を救うのは、 人間だ。

—大阪・関西万博184日の記録—
国際赤十字・赤新月運動館に
寄せられた思いを
赤十字の未来につなぐ

企画 国際赤十字・赤新月運動館
制作 株式会社世界文化社

アートディレクション&
デザイン 内藤美歌子

編集 大山直美・阿部聖子

校正 株式会社円水社

印刷・製本 TOPPANクロレ株式会社

DTP製作 株式会社明昌堂

写真提供

丹青社 ©河野政人(表紙、裏表紙、中央以外、P1、P6下、
P10下、P11下、P14右、P15右3点、P16、P17、P19上、
P20、P21、P23下2点、P30、P31、P32下、P35)
共同通信社(P7右2点、P12上)
「L'Exposition universelle de 1867 : illustrée」
(P13右上・下中)

ICRC Archives(P13左上)

ICRC(P13左下、P25左下)

東日本大震災アーカイブ宮城(石巻市)

(P26下2点、P27中)

発行日 令和八年三月三十一日

発行 日本赤十字社

〒一〇五八五二一 東京都港区芝大門一丁目一番三号

電話 〇三(三四三八)二三一一

©Japanese Red Cross Society 2026
無断転載・複写を禁じます。

